

---

# ボクとイロイロと異世界

naka

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボクとイロイロと異世界

### 【Nコード】

N5264N

### 【作者名】

naka

### 【あらすじ】

異世界っぽいファンタジー。

色々あって、やってきた主人公の話。

…ほのぼのとかあらすじに書いておりましたけれども、そんなにほのぼのでもなかったのと、あと色々であらすじを変えました。

## 00 こんな設定で進行するはずだった

テキトー国の外れにある山奥に、何時からいるの解らないが悪魔が住んでいると言われている。

ワイバーン種やドラゴン族がその山に近寄らないのはその悪魔が餌にしまうからだ。

だから悪い事をしたらお前もあの山に置いてくるぞ。と子供への脅し文句によく使われるのだ。

秋の終わり頃。

私は伝説のトチノ山に登山していた。

悪魔と呼ばれる物についての知的好奇心と、あるのではないかと噂される宝物を手に入れる為に潜り込んだトチノ山探索隊。

そのパーティーも行きは三十名近くいた筈だが現在は私の他にいない。

全滅の予想は早々とあった。いや、全滅とは違うがそれに近い。

実は山の麓に到着する少し前から降雪は確認されていたのだ。

で、山や雪山登山の厳しさを知る人たちは離脱した。装備が充分ではないから止めておけと彼らは言った。

それを聞いた人たちの中からもそうではないかと思ったのか帰っていった。

残ったのは無謀者か私のような理由ありの馬鹿だけだった。

だから自業自得の結果である。パーティーの一部がバカをして人数を減らしただけ。いや、間違い無く全滅でだと男は考え直す。

山は恐ろしい所という知識だけはあった私が揃えた装備は他のものよりはマシではあったが、それは雪山では全然足りなかった事を私は実体験して知識を得たが、どうやらそれは次にいかせそうなのが残念である。

そして私は精神肉体からくる疲労に一人という孤独。ついに眠気に負けてしまったのだ。

私気がつくつくと、そこは見覚えのない一室の中であり布団の中にいた。

暖房がよくきいた部屋には机とベットとベットの反対側には私の着ていた衣類が吊るされてあった。

なら私はどのような状態であるかと思うと、厚手の茶色の寝間着で、それを私は所有していた記憶はない。

ここはどこであろうか。離脱した誰かに救助されたのであろうか。いったい今はどの様な状況なのか考えてみても、都合良く救助されたとは思えないが、そんなに都合良く救助されるものであろうか。

私は考え事をしてしていると周りが目に入らなくなってしまうことが多々ある。

ドアの前に水差しと洗面器にタオルを持った子供二人が驚いた様子でこちらを見ていることに気が付くのに時間がかかってしまった。

「こんにちは」

私は怖がらせないように適度に頬の筋肉を弛めて挨拶をする。

私のニッコリ挨拶は子供の泣き顔しか返さないから同僚と研究し

た結果、これが無難だったな。そんなに私の顔は怖いのであろうか。

泣かないでくれよと思いながら彼らのリアクションは

「マ、マ、ママァー、おじさんがあ、おじさんがあー」

「ママァー」

と、走って親を呼ぶであった。うん。実に正しいが水がこぼれている。

しばらくすると一人の少女が食事を持って部屋にやって来た。

「体調はどうぞです」

「ここは」

「ボクの住居だよ。あつ、ごめん。食事持ってきたんだ。まずはそれから、落ち着いてからで」

そういつて彼女は木のお碗からスプーンですくい、彼女の口許へ運び！？

「ふーふーだと！？」

「はい、どうぞ」

そのまま私の口許へ。

「まだ少し熱かったかな」

いえ、違うんです。照れなんです。ええ、私の状態からそうして  
くれるのだと理解しておりますが、誤解もしてませんしませんが、  
やっぱり照れるんです。はい。

「い、いただきます」

私は口を少し開きスプーンを口内へ。程よくさめたスプーンの上  
の物はあっさりとした、正直にいうとえらく味の薄いお粥のような  
物であった。

「うんうん」

彼女はそれからお碗の中身がなくなるまでふーふーしてくれた。

「ご馳走様でした。それで私は」

「あつ、うん。貴方はね、山の中で倒れていたのを見つけて、その、  
貴方だけ、生きてたから、ごめんなさい」

「そうですか、ありがとうございます。ところで、貴女は」

「うん？」

彼女は何を聞かれているのかわかってくれなかった。私ももう少  
し話を学ぶべきだと何時も思うのだが仕事でそれを忘れてしまう  
のだった。

「私はジヨバンニといいますが、貴女の名前は」

「ボクはアオイっついていいいます、その仙人見習いというか、そういうものです」

センニン？

「センニンとはなんですか」

「んー、なんか凄い人かな」

凄い人と言われても具体的にどう凄いのかは解らないが、言いたくないのだろうか。それとも本当にただ凄い人で表現が難しいのか。まあどっちでもいいのだ。

それから、しばらく私はアオイさんにお世話になった。

体調も戻った私が家に帰ろうと思い、そう言ったらここがトチノ山の頂上付近で下山はまだ難しい事をしてしたり、

家屋の裏には大きな畑があつて、雪が一切積もっていないことに驚き、また農業の楽しさを子供達に教えられたり、ありえないスピードで育つ作物を見て、センニンって本当に凄いのだなって思ったり、

少しズレているアオイさんの目線と子供たちの目線にここでの暮らし。それは私に様々な発見をもたらしたのだった。

そして暦の上では春となった。

私は何故かトチノ山麓にある村の宿にいた。自分が何故にここに  
いるのが解らなかった。

トチノ山に行く用事も何も無い筈なのにだ。というか、この冬に  
自分は何をやっていたのかもわからない。

宿の女将に何故自分はここに居るのだ、と、頭の悪い質問をして  
みると女将はごく普通に答えてくれた。

数年事にお客さんの様な客が来るのだと。自分はなんでここに  
いるのかと。

先代もその前もお客さんみたいな質問をする人がたまに来ていて、  
山の悪魔の仕業なんかじゃないかって思うんだと。

7

私は職場に戻ったが、そこに私の場所はなかった。  
パツとしない職員が長期間も連絡無しに欠勤すればどうなるかと  
思えば当然ではあった。

それから私は実家に戻った。

テキトー国の外れにある名前もない村に私の実家がある。

両親、家族は街に出てもダメだった私をあたたかく迎えてくれた。  
農家の息子であるにもかかわらず農業が嫌で街に出た私なのにだ。

跡取りではないから農地を継ぐ事は無理だが、オフシーズンに手  
伝ってもらい来年度に間に合う様に開墾する事が出来た。



あれ程嫌っていた農業も案外楽しいものと再発見した。  
勿論楽しい事ばかりではない。自然の猛威でどうしようもないこ  
とが起こる事、それも農業である。

村の幼じみの娘を嫁に貰い、新しい家族で楽しく生活を私はおく  
っている。

ただ、あの冬に何が起きてどうなったのかはいまだに解らない。

00 こんな設定で進行するはずだった(後書き)

10/09/03 最初を修正

## 01 始まり

テキトー国の外れにあるあんまし人もこないトチノ山には悪魔が住んでいる。

トチノ山の悪魔、それがこの話の主人公アオイである。

彼女の前には衰弱した幼児が寝ている。発熱、疲労、栄養不足どれも成人でもキツイのだから幼児にとっても当然それ以上に負担となっている。生死の境目だ。

医者でもないアオイにできる事は、栄養が詰まっっていて胃に優しく飲み込みやすいお粥を定期的に流し込み、体温に気をつけること。それ意外に出来ようがない。

水差しと洗面器の水を取り替えてきてもらえないか、と部屋の前を通りかかった子供に頼み、また用事の寝ている寝具の側においた椅子に座り様子を観察を始めた。

アオイがトチノ山に住み始めたのは千年ぐらい前だ。

農家の娘として生を受けたアオイは不幸にも不作が続く年に産まれた。

上の姉らは人買いに、兄らは労働力として使えなければ人買いかご奉公へと送られ、幼児で労働力としても使えず、ここ最近の不作

で供給過多となり人買いも使い道のない幼児は買い渋る有様。  
ただただ飯を食うだけのアオイは家族からしてみれば邪魔だった。  
売れもしないし、飯を食うだけの娘だったらいらぬ。  
両親は寝ていたアオイを夜中にびっそりと連れ出した。

「んー、とつちゃ？どこだココ」

アオイは気が付くと父に背負われて夜中の外にいた。

「だみゃれ、こんのただ飯食いがあ」

「ひゃう」

とつちやがまた怒っている。アオイはなんかしゃべったらまた殴られる。だからおとなしくした。怖いけど殴られるのじのよりかはいい。

互いに無言で道中は進み、山の中腹辺りまで来たところでアオイの父は止まり、背負っていたアオイを抱きかかえて

「じゃあの」

といて木の子生い茂る斜面へと放り投げたのだった。

色々あつて現在へと至る。

だからかアオイは自分にも似た境遇である捨てられた子供を見る  
とほっとけないのである。

目の前の幼児もまた捨てられた子供であった。

「う……ああ……ママァン」

峠は越した。まだ油断は許さないが一先ずは安心である。

10日後。

そこには元気に畑を走る幼児の姿があった。

「いやぁー、驚いたね。あの時は死ぬかと思って諦めていたところに。神様に感謝しないとイケないね」

## 02 バス浪漫

テキトー国の外れにある山には悪魔が住んでいて、それがこの話の主人公である。

「ほらっ、早くお風呂に入りなさいッ」

「やあー」「やあー」

複数置かれた長テーブルの間をドタバタと走り回る幼児二人にそれを追いかける歳上のお姉さん。

それとは別にお風呂に入る準備をしている子供達がいた。

「きゃははー」「ははー」

幼児二人は小柄な身体を活かして他の仲間にぶつからないようにちよこまかと間を駆け抜けるが、少女の方はそれは出来ないし無理であった。

「あーっ、もう」

「しょうがないなあ。はいはい、マーナ、ミーナ、素敵なハイパーオフロタイムだよー」

「やったあー」「お風呂タイムー」

二人はそうはしゃぐと少し遅れたがお風呂準備隊に混ざって行っ

た。

「なんでなの、お母さん」

「さあ」

少女をあの一人が子供ながらにからかっていたとは言えないアオイだった。

そこそこ人数の増えた現在の状況においてアオイが直接子供の面倒を見ることはあまりなくなってしまった。

最初の内は何簡単な読み書き計算に調理家事と自ら教えてきたのだが、連れてくる子供が増えるうちにそうも行かなくなった。すると年長者らが自発的に新顔の面倒を見始めたのだ。

それは循環していく。今も半分がお風呂でその間に残りは食後の片付けを皆でする。最初のお風呂組が楽かというところ、調理組なので一応バランスは取れているのだコレが。

そうするとアオイの自由時間は増える。やる事といったら昼食用意と風呂に寝る前のお話しぐらいである。裏の農園は子供達に取られてしまったし、散歩ぐらいしかやる事はないのである。

仙人見習いなのだから仙人になれるように修行するべきなのだが、まだアオイは俗世間に未練があった。

散歩の間に時々子供を保護するのもアオイの仕事？である。

「ママア、あのね今日ね」

「それは素敵なことだ」

「まあママはいつつもそうだ。まだ何も言っていないのに」

後片付けも終わったお風呂後半組とゆっくりと会話を楽しむのもアオイにしかできない事である。

冷静に考えるとアオイは最初に保護して後は投げっぱなしなのに、なんでこんなにかかれているのかと思っただけであった。

多分刷り込みだろう、洗脳だろう。疲れて本能的にもうダメだと思っただけに助けてくれて、あつたかい食事に寝床。それに年長者たちによるアオイ信奉。この人は僕らにとって良い人だと本能で察するのだろう。

少々嫌な捉え方をすると無自覚に媚びているとも考えられるが、案外子供はそうであるのかもしれないと思う。

「やあー」「やあー」

「コラッ、ビショビショであんたたちはもうッ」

しばらく談笑を楽しんでいると前半組がお風呂からあがってくる。ミナーマーナがビショビショでそれを追っかけて少女も濡れた格好で走ってきた。

「ぶむ。これはこれで」



少年は楽しんだ。

「ああー、ちよつとあんたら見た分だけ手伝いなさいよ」

「ちよつと退いてくれミリーよ。ミリーが見えん」

もう一人の少年は問題発言をした。

「マーナだろつ常識的に考えて」

「お前ら出て行け。ほらマーナミリーナ、ハイパーゴシゴシタイムだぞー」

「わー」「わしゃわしゃー」

「なんでよ」

「さあ」

そうこうしていると前半組もお風呂から全員引き上げてきており、後半組も既に脱衣所に入っていた。

「うん、皆いるね。よしハイパーおやすみタイムだー寝るぞー」

大広間に敷き詰められたお布団。寝る時も皆で寝よう。寂しくないから。

「ここで思わず盛ってしまうようなはしたない年頃のものなど存在していいようもない。」

「おカーさん男二人いないよー」

「いないのだ。」

「気にするな。よーし皆ーおやすみー」

そういつとアオイは部屋を暗くした。

「おやすみー」「おやすみー」

……

……

…

「寝れない」「寝れないのお」

「しょうがない。お話をしようか」

「わー」「やったー」

シーー アオイは口許に人さし指をあてる。

「そうだな」

むかーし、むかし。

とあるむらにたいそう怠け者の男がおった。

その男は働きもせず真昼間から平場で子供と遊びほうけておったのじゃ。

「おつかあ、金、金だよ。金をおくれよ」

男は家に帰る時、それはご飯を食べる時、寝る時、あと金をむしんするときじゃ

「なんじゃユキオ、おらたちはもうお金なんかないんじゃよ。冬も越せねーだよ」

んだども年老いた母一人。我が子だから見捨てられぬといままでせつせと貯めた貯蓄も渡してはいましたが、それもとうに空じゃ。

「うるせーババアッ！！」ポカッ

「アガアッ！！」

おばあさんは悲鳴をあげたつきりもう動かなくなってしまうた。

「し、死んでる」

そして男は働きもしていないから貯蓄もなく、親殺しである事と同情する大人誰一人もない事から冬も越せずひっそりと消失したとさ

おしまい

……  
……  
……

ふう。少々難易度の高い話だが寝ついてくれたようだ。

この話は素晴らしいな。あまりの酷さに大半が寝るんだからな。

「アオイさん。その話はダメだろう」

暗闇の中。部屋の出入口に一人たつ者がいた。それは問題発言のトム。問題発言のトムであった。

「そうだね。ボクもそう思うが、で、だ。反省したかトム」

「ああ、隠す努力の大切さは理解したさ」

「ちゃんと明日あやまるんだぞ。不埒な妄想して楽しんですまんかったって」

「逆にだめでしょうそれは」

「解っているなよしよし。ところで相方ジムはどうした」

「マーナ、おれだあー、うけいれてくれえー」

「あれはダメだな。トムおやすみ」

「おやすみなさいアオイさん」

02 バス浪漫（後書き）

10/09/03 最後に少し付け足し

### 03 むかーしむかし

テキトー国の外れにある山には悪魔が住んでいて、それがこの話の主人公である。

アオイは同居人には秘密にしているものがある。その一つがアオイの住むトチノ山中腹の洞窟奥深くにあるちよつとした広場には見事な桃を実らしている木だ。

それはアオイが仙人なら桃だろうと思い、植えた桃の木である。その周りにアオイとその友人であり仙人友達のシオンがいた。

「今年初のハイパー収穫タイムだね」

「そうですね。ふふっ」

そういつて二人は桃の木に手を伸ばし、実りをもぎとっていった。

……  
……  
……

凹凸の少ない小柄なアオイに対して、引つ込む所は引つ込んで出て出る所は出ており背の高めなシオン。

肩の上のショートカットのアオイに、腰の下の方で切りそろえているシオン。

行動的なアオイに、どちらかといえばインドアを好むシオン。

このタイプの違う二人が出会ったのはアオイがまだ日本にいた頃

の話だ。

山に捨てられたアオイは都合良く助けられる存在と出会う事もなく活動を停止する事になる。

そしてそこに現れたのが仙人の本場中国から旅をしている老師あるいはどこからどうみても仙人っぽい仙人チュンだった。

通り過ぎるだけの予定だった山で無の者だったものを見つける。

これは珍しいと思ったチュンはアオイを仙人パワーで再構成し引き取ることにしたのだ。

幼すぎたアオイの限界にまで達した疲労により考える力も無かつただけの事なのだ。後にそれを知ったチュンは一人山奥にこもる事となるのだが、それはまたどうでもいいことだ。

それからチュンの住む中国のある山中に移り、アオイの仙人として始まるのだが、アオイにはまあ素質が無かった。付き合いの中でいい奴だとは思うのだが仙人として考えると別だ。

落ち着きがない。国外に来て見るものが新鮮だった最初はしようがないと思っただが、後になってもやっぱり落ち着きが足りない。これは子供に悟れといってもしようがない事なのだ。

「あの雲はスイカのように丸い雲ですよ。あっちはカマキリですかね」  
欲を捨てきれない。子供であるからやっぱりしようがないかとチュンは思い月日の流れに任せてはみたがやっぱり欲を捨てきれないのだった。

「大きくなれツ！！ 大きくなれツオツパイツ！！ なぜ大きくな

らん」

仙人となると使えるようになる恩恵だけはマシだった。

「見てください。たわわに実った桃ですよ。師の教えが良いからだね」

チュンさんは悩んだ。仙人になれる素質あるかと思っただし、こいつが死にそうだったから、順序は違っけど勝手に仙人にしたぜ。だけどそれは勘違いだった、とは誰にも言えない。

仙人が仙人をつくること自体ルール違反なのだ。もしバレたら

「おめー、何勝手に仙人つくってんの！？ バカなの？ アホなの！？ おめーの席ねーからこれ」

「ひー、勘弁してください」

「あーあーきこえない。みなさーんこいついまから無視だかなー」

「ひゃー」

こうなるだろう。それは回避しなければならぬ。そうするためには、どうしてもこいつには文句も言えないほど立派な仙人になつてもらわないといけなのだが、やっぱり素質がない。

何がいけないのか。それは自分かこいつ、もしくは両方しかない。一回誰かに見て貰おうか。そうしよう。若手で気の強くなく、ちくりそうにないヤツがいいだろう。ごまかせるし。



チユンさんも意外と俗世に浸かっていたことには気が付いていなかった。

とりあえず、その条件に当てはまったということで白羽の矢が当たったのが仙人となつてまだ新しいシオンであった。

「よろしく願います」

「こちらこそよろしく願ひね」

「はいッ!!--」

アオイの修行の日が始まった。

まず、この娘は幼すぎるとシオンは思った。我慢をおぼえさせる。

「ふわあー、あだっ!!--」

欠伸をしたアオイのお腹に容赦なく竹を縦に切つて束ねた物が打ち付けられる。

「アオイさん、どうして叩かれたか解りますか」

「欠伸、したから?」

「ピシッ!!--」

「ギャッ」

「そうですね。それも違いますね、まず大きく口をあけて欠伸を

した。これを人前でするという事は、とてもはしたない事です。欠伸をするなどは言いませんが、出来るだけそういう事は目立たないようにするのが好ましいです。

貴女が女性だからという理由ではなく男女共通の話ですよ、これは。ですが女性なら一段と気を付ける。その方がやはり好ましいと私は思います。

では、二度目の理由。お解りになりますか」

「解らないよ」

ピシィー！

「そうですね。女性がその様な悲鳴をあげるのは好ましくないと私は思います。そういうことです。

三度目もそうですね。お解りになりますね。貴女がどのような言葉を使いになられようと自由ですが、まずこの場ではそういう事なのです」

「そんな事一言も言わなかったじゃないか」

「ええ、言いませんでしたね。でしたら、そういう事ですからお気をつけになってくださいね」

「わかったよ」

ピシバシッ！

二度、シオンの竹がアオイを襲い、思わず出た悲鳴はシオンには  
気にくわない悲鳴でもう一度アオイを襲うのだった。

「アガッ」

「それは先程から注意してます様に違いますよ。角度とか」

「ギャッ」

「正解ではありませんね」

「アアッ」

「……」

「シオンお姉さまあ」

（どうして……こうなったのかしら）

「お姉さまお祭りですって」

「ええ、楽しみですわね」

「はいっ」

そして数年。シオンによるアオイ再教育プログラムは終わった。予定外の事も起きたが愛の鞭と飴でそこその淑女に仕立てあげることが出来たかなとシオンは思う。

「さて、アオイさん」

「はいお姉さま」

一部予定外な方向に向かった所もあるが。

「アオイさんよく頑張りましたね。もう私が教えにできる事はもうないと思います。」

でもこれまでの数年間に私から教わった事、それら全ては使わなくてもかまいません。引出しの中にしまっておいて下さい」

「!?!?どういう事でしょうかお姉さま」

「言ったとおりです。貴女が思う様に、言いたいように使う言葉。それが本来は正しいのです。」

けれど、それは時にして美しくないといい事もあります。使ってはいけない時も来るでしょう。

そういう時の為に憶えていて欲しいのです」

「お姉さまぁ、うう、ありがっ、ありがとうございます、ひぐっ」

「アオイさん……それとお姉さまは止めてください」

「！っ、っえ」

「これからはお友だちとしてシオンと呼んでくださいね」

「はあい、お姉さまぁ」

ビシイ

「ひゃあん」

そしてアオイはシオンの住む日本からチュンの待つ中国へと帰っていった。

だが、この時シオンもアオイも気がついていなかった。アオイが仙人としてはあまり成長していないことに。

……

……

…

「アオイさんこちらを向いて下さい」

「んっ？」

「お顔がよごれてますわよ」

水分の多い桃を果汁を垂らすことなく食べるのは難易度の高い事。シオンはしまつてあつたハンカチを取り出し、アオイの口まわりのを優しく拭う。その光景は母娘のようであつた。

「んっ、ありがとうシオンさん」

「どづいたしまして」

「……………」

「……………」

「シオンさあん」

「どづしたの甘えた声をだして」

アオイはシオンに抱きつくと、母を求める幼児の如くシオンのたわわに実つた母性に顔を埋めた。

アオイの師も優しくなくはなかったがアオイの求める優しさはなかった。

「……………お姉さまあ」

だけでも目の前の友達にはそれがある。  
厳しく優しく指導してくれた友達でお姉さま。

何時も、今も嫌がる素振りもみせない。だから甘えさせてもらっ

」  
「あらあら

ほら。

シオンは黙ってアオイの頭を優しく撫でる。アオイが満足するまで何度も何度も。

アオイの子供達には見せれない秘密の姿がそこにある。これもあ  
るから秘密なのだ。

## 04 飛竜山 前頭八枚目

テキトー国の外れにあるトチノ山には悪魔が住むと言われている。

午前は勉強、お昼を自ら用意して、午後は食料調達に自由時間。暗くなったら自分らで用意した晩ご飯にお風呂。

あるのは何時も同じ絵本に教科書。自分の知っている話なんて何周も聞かされているだろう。

この様な環境で子供達に芸術を楽しむ心、文化的教養が芽生えようか。否、できまいて。

正直な話をすると言自分が限界であった。やる事がない。

「というわけでボクは少し出掛ける事にするよ。何かお土産期待しててね」

晩ご飯の後にアオイはそう皆に告知し、皆の反応を見ないで部屋に戻り荷造りをするのであった。

トチノ山とは反対の方に位置するヤマモト山はトチノ山とは違い、悪魔は住んでいるとかしういう迷信はないがドラゴンの集落がある。そのドラゴンをトチノ山に移住しても良いというドラゴンを探しに来たのである。

ドラゴンと言えは財宝を溜め込むのが好きな種族であるらしい。成金か文化的教養溢れる生物のどちらかだと良いな。前者だったらどう誤魔化そうか。しかしドラゴンかあ。楽しみだなあ。



アオイはヤマモト山を登りながらそう思った。

「んだこらあタココラッ！！えっーゴリアッ！！ぶっつぶしてやっかなーおいっ！！タココラッ！！」

アオイ人生初の生ドラゴンは成金でも文化的教養あるドラゴンのどちらでもなかった。

何というか、その、小者の匂いがね、漂うですよ。このドラゴンからね。三下。それも圧倒的三下。それが彼の匂いだった。

「んだこらあ！！んだてめーはッ！！きっもちわるいもんボンガボンガだしやがってタココラッ！！殺すぞタココラッ！！」

(気持ち悪いって、んなこと言われてもなあ)

「このカマ野郎があ！！えーコラッ！！」

カマ野郎？

「ちょっと待ってくれ。ボクは人間で言うところの女性であり、けっしてオカマではない。そこは訂正してほしいんだ」

「あっー、んなこったあ知らねーよタココラッ！！ 殺すぞタココラッ！！」

……  
……  
……

「君はさつきボクのことを気持ち悪いとか言っていたけどさ、そんなにボクは気持ち悪いのかい。どうなのかな」

「すみませんでしたタココラエッー！！ 調子のもってましたマジ。その空気、雰囲気がい質だけで、その気持ち悪くはないですタココラ」

「雰囲気？」

「属性が黒でもなく、白でもねえ。それがこちらでは珍しいんつうーんだよタココラ。姐さんはどっちでもなくて混ぜてもいいねーのって、これはまず、いねっーんですよオラエー」

なるほど。それはボクがまあ余所者だからそうなっているのだろう。仙人ですしね。

「で姐さんは今日は何しにきたんだタココラ」

「ん、トチノ山って知ってるかい。そこに移住しても良いって文化的教養溢れる生物をスカウトしにきたんだけどね」

「俺は無理だタココラ。トチノ山は無理だタココラ。あそこはやばい、マジパネーから。んな所にいく強者探してもいねえっすよそんなん」

「何で？」

「あそこも空気が変わっすよタココラ。姐さんみてーなくう、き？あばばばっ、姐さん無理、無理むりーっす。犯人が貴女です。姐さんのせいですよタココラ」

「そつか。いまいちよくわかんないけど、んー、その空気って誤魔化せたりするかな」

「え？ここは無理矢理おいらっちを連れて行く場面じゃねーのかタココラ。ごまかせるのかはしんねーけど、なら君を連れて行くよっとかって展開すんじゃないの」

「え？常識で考えてそれはないよ。展開と違ってなにそれ。君は変な話の読みすぎじゃないかな」

「だいたい拉致同然で連れて来ても有効な関係に発展しにくいだろう。」

ドラゴンとか子供丸呑み出来そうだし、それやられたら困るし。アオイはそれを言っただけで学習されても困るのでそれを口に出さずに思うだけに留めておいた。

「そうかタココラ。良かったぞタココラ」

「あれ？こうすれば感動した君がついて来るってパターンじゃあ」

「それはねーよ。姐さんも三流お話の読み過ぎっすよタココラ」

「だよね。三流云々は否定するけどさ」

一匹と一人は大声で笑った。

そしてアオイは帰っていった。

その数日後アオイハウスのドアをノックする音が。

アオイがドアを開くと一匹の見覚えのあるドラゴンが。

「遊びにきたぞタココラアッ、もてなせオラエッ」

「もちろんだよ友よ」

「こつという感じでどうだい」

「だからねーってタココラ。お約束すぎなんだよエッータココラ」

「そうか。まあしょうがない。空気が君たちにとって正常だと感じれたその時はこつちに遊びに来てくれ。歓迎するよ」

「おータココラッ！！考えてやんよ」

「ボクはアオイ。トチノ山のアオイ。君は」

「紅ベコ（あかべこ）のドナドナ。ヤマモト山の紅ベコは俺の事だ  
タココラ」

こつしてアオイの文化教育計画は失敗に終わった。だがアオイは強烈な友人と知り合う事が出来た。

人間の少女と間違われそうなアオイと仔牛サイズの紅翼竜ドナドナ。

この二人は今出会ったのだ。

「と言っわけだよ」

「ふーん、でママ、お土産はあ」

「あっ……お土産はね、この話だよ。うん」

## 05 力の一号ともつと力の二号

ボクは基本的にはお茶目な方だと思う。

例えば、家の裏にある畑。

そこは子供たちが一生懸命に手掛けた畑なのだが、ちよいつと力を緩めると全滅しちゃうよねとか思っちゃうんだ。

出来ないんだけどね。面倒だから半永久的に力がみなぎるようにしているからそれを解除するのは面倒だし、食事が淋しくなるしね。

魔がさすことってあるけど我慢だよ。でも我慢出来ない事もあるよね。

この前食堂に行ったらさ、テーブルの上にクッキーが山盛りで置いてあったのさ。

小腹がちよいつとアレだったし、周りに誰もいなかったからさ、そついつ時つつまみ食いしちゃうよね。

長く生きているからか元々の好みなのか知らないけどさ、自然の甘みは別として甘味は甘み少なめのが好きなのよ。

そのクッキーは好みストライクだったね。ど真ん中。

で、もう一枚良いかな、もう一枚良いよねを繰り返してたらさ、半分近く無くなっていったんだよ。

これはマズい、と思うわけさ。誰のかは知らないけど普通ガツカリするよね。お茶目ってレベルじゃないしさ。

ボク的にはこんな人の目につく所に美味しそうなのを置いて食べるなって無理でしょって言いたいけど、それは流石に通らない

苦しまぎれの言い訳だとも理解しているのさ。逆ギレ格好悪いと。

じゃあどうするのかと考えた時に何か思いつくかというのと、それはノーなんでさらに困るんですよ。

何を主張したいかと言うとよくわからないけども、誰のかは知らない美味しそうなクッキーがあったからたべちゃったけどボクは悪くないと思うけど、なんかその考えは駄目っぽいからどうしようかって事なんだよね。

「あぁー」「あぁー」

どうしたらいいのかと悩むボクにその場凌ぎタイムが来たんだよね。

「やぁマーナにミーナ。ごきげんよう」

「アオイさん。ここに置いてたクッキー知らないかな」「どうですか」

美少女から元気っ娘に成長したマーナと美少女から美少女へと進化したミーナははつきりと疑いの目をボクに向けてくる。

「あれ？アオイさんどうかしたのですか」「顔が少し青いかと」

「いやあ、アオイの顔が青い。はははナイスジョーク」

ぬう

「美味しかったですか」「どうですの」

「うーん、何のことはよくわからないけども、仮にボクがそのクッキーを食べたとして感想を持つとしたら美味しかったよっていうんじゃないかな。想像なんだけどね」

「くくく食べおったぞマーナよ」「食べおったなミーナよ」

「ぬはははは、そのクッキーが暗黒クッキーとも知らずになつ！」「！」

「あ、暗黒クッキーだって!？」

「暗黒クッキー」

それは闇の力でつくられたクッキーで美味である。ゆえに闇に耐性の無いものが食すと、死ぬ。

存在のみ確認されており製法を知るものは確認されていない。もしこのクッキーのレシピが世に出回ったとしたら大変な事になる事間違いないであろう。

暗黒クッキーを、ボクは食べた？

ミナマナは知っていた……ミナマナが?……!!

「君たちは何者だッ」

「ほう」「ミーナにマーナですよアオイさん」

なぜに気がつかなかったのだろうか?このミーナとマーナは偽物



だという事に。

思い出せばすぐにわかる事だったのに。ミーナマーナはまだチビッコなのになッ！！

「違うね。ミナマナはもつと、チビッコだッ」

「くくくそうか」「不覚ですな」

バツとミナマナはジャンプし空中一回転をしたかと思うと二人の、二人の変態がそこにたっていた。

「我が輩の名はソノーバカギリー一号」「我が輩はソノーバカギリー二号」

1対2。これは間違いないッ！！ 相手の実力も解らないッ！！  
そう。ピンチだッ！！  
だれか、だれか助けてッ！！

「話は聞かせてもらいました」

だれかきたッ！！ ……？

「……」

「……」

（この人誰だろ？）

「いいですか。あなた達は1+1=2で同じになっただけと思うかもしれませんが。ですが私たちは1+1=2ではないのです。3?4

？違います。1 + 1 = 2000なんです。わかりますか？ 十倍。十倍なんですよ」

(え、ええー)

「……なんか、もう……帰るわ」「お邪魔した」

「ごめん」

「いや」「ごちらこそ」

「んじゃあ」「」

謎の一号二号は夕焼けの向こうへと羽ばたいていった。

どこまでもどこまでもオレンジの、夕焼けの向こうへと。

彼らの戦いはまだまだ続き、これからなのだ。彼らは飛びはじめたばかりなのだから。

この夕焼けテキストというスカイのなッ！！

オマケ01 カードキャプターまなみな（前書き）

本編とは関係ありません

## オマケ01 カードキャプターまなみな

あたしミーナ。おねーちゃんでもーとのマーナとお家の地下を  
探検してたら変なスティックが二本あったの。

マーナがピンクので、あたしは青いのでちゃんばらしてたらブワ  
ッーと光が出てきてビックリしたのー。

『ツインリトルウィッチ ミナマナ』

君の勇気が胸を熱くする 怒れる闘志は力に変わる  
熱い熱意のマジカルパワー

愛と勇気が支えになり 君とあたしの無限の力だ  
正義の嵐だマジカルパワー

ゴゴゴゴ 必殺シャインストーム  
ゴゴゴゴ 合体マジカルビーム

卑怯な奴らを打ちのめすんだ  
正義のツインリトルウィッチ ミナマナ

第一話 リトルウィッチ降臨!!

ミーナとマーナは双子のとっても仲良し。遊ぶときも寝る時も二  
人は一緒。

何時もお兄ちゃんお姉ちゃんも一緒になって遊んでくれるのに

今日はお手伝いがあるからと二人だけです。

「ミーナ。お家探検しよー」

「ええー。本読むのー」

「本は後でも読めるのー。それにお姉ちゃんもお母さんもないのー。だから探検するのー」

アオイさんにおにいさん、お姉さんとミナマナの総勢八名の暮らすこの家は二十人ぐらいは余裕で暮らせるように、

元は四名ぐらいが住める住宅に改築を何度もしたもので、二階に六部屋、一階に食堂、浴場、広間とアオイの個室があり、地下には元々は倉庫でいまはただの物置となっている部屋がある。

一階にある階段には二人は近づいてはダメと言われている。そしてミーナはそこに行くこうと言っているのだ。

ミーナは、きっとそこにはお菓子が隠してあるのだと思う。ミーナはダメだと言っていているからダメなんだと思っている。

「うーん」

「ほら行くのー」

「わわわわー」

ミーナは渋るミーナの手を掴み強引に引きずる様にして連れて行くのであった。

一階の階段を二人は降りて行く。段々と薄暗くなっていく周りに  
ミーナは不安になってミーナの手をギュッと強く握る。

「おかつしーおっかしー」

が、ミーナはそんな不安なミーナの心境などは下にあるであろう  
お菓子倉庫に夢中で気付くことはない。

薄暗い地下階段を二人が下り、明かりが下に届かなくなった所で  
階段の終わりとなり、木製の見なれたドアがそこにあった。

近寄ったらダメだと言われているのに近寄ってしまった事がバレ  
ると怒られるので今の内に引き返したいミーナだったが、ミーナは  
そんな事も考えていないのかさつさとドアを開けて同じく薄暗い向  
こう側へとミーナの手を引いて連れて行く。

ミーナが空いている片手で何とかドアを閉めるとミーナは繋いで  
いる手をさつさと離して奥へと進んで行く。

ボンヤリとした灯で薄暗い地下室とそこいらに置かれている物の  
おかげで歩くのにも注意が必要な室内だ。

ミーナはそんな事は関係ないとばかりに物を踏んだりしながら歩  
いているがミーナはそんな事を出来はしなかった。

「ミーナ、ええっと、固体蛇専用紙箱？何これー」

部屋の隅に置かれてある箱にお菓子が隠されていないかと調べて  
みたけど入ってなかった。こんだけ大きいのに何も入っていなくて  
ミーナはガツカリした。

「本だ……中国四千年の武術？民明出版？」

「知っているかっ！！ミーナ」

「え」

「……あ、何だろうこれ」

マーナは話をずらす為に近くに立てかけてあったファンシー桃色で先端にハートをかたどった飾りがついているスティックと爽やかな青色で白い天使の羽をかたどった飾りが先端についているスティックを見つける。

マーナは爽やかな青色スティックをミーナに渡し、自分はファンシー桃色スティックを両手で持ち正面に構える。  
それをみたミーナもマーナと同じくして正面に構えた。

二人には言葉はいらない。棒が二本あるならチャンバラだ。

ジリジリとにじり寄るマーナと動かずマーナを観察するミーナ。  
動のマーナと静のミーナ。

「やあっーっ！！」

一歩大きく踏み出し、ふりかぶるマーナ。ミーナ動かず。  
そしてミーナに襲いかかるファンシー桃色スティック。

ボガッ！！

マーナ渾身の一撃がミーナの頭に直撃ッ！！

だが同時にミーナの胸への一撃もマーナにヒットッ！

両者のチャンバラは痛み分けであった。

「痛い」「痛いね」

チャンバラ一戦終わればそれはもうノーサイドである。

マーナは当たったミーナの頭をさすり、ミーナはマーナの胸をさする。姉妹愛である。

「ねえ」

「どうしたのマーナ」

「これから変な声が聞こえるのミーナ」

マーナはそう言ってファンシー桃色スティックを掲げた。

「変な声？」

自分はそんな声は聞こえてはいないミーナは爽やかな青色スティックを右の耳にあててみるもやっぱり聞えはしない。

「うん。ひとつのよ、ひとつのよ、って」

「ふーん」

左の耳にあてても聞こえないのだから聞き間違いか勘違い、もしくはマーナのは特別なのか。

ミーナはそう考えマーナがズルいと思った。



(人の子らよ……)

「ッ!」「んアッ!」な、なに」

(私たちは貴女達の持っているマジカルスティックの精です)

(正確にいうと違うけどそんなモンだよね)

(私たちは貴女達を待っていました。ワルデス帝国の侵略でメツボ  
ー王国は滅ぼされてしまい、何とか私たちは難を逃れこちらへと逃  
げ込んで来たのです)

(といっても売られ売られてここにいるんだけどね)

(ですがワルデス帝国は次元を超えてこちらを侵略しようとしてい  
るのです。私たちはそれを止めたいのですが私たちを使うのには適  
合者が必要で、それが貴女達なのです。どうか協力してください)  
(というか私たちのせいでワルデス呼び込んだ様なもんだし、年齢  
さえあつてれば誰でも使えるから君たちでないといけない理由はな  
いんだけど協力してね)

「うーん」「んー」

「マーナは」「協力してあげてもいいかな。ミーナは」

「あたしも」「うん」

「いいよー」「いいよー」

(ありがとうございます。では契約を)

そう聞こえたと思ったたら突然光だしたファンシー桃色スティックに驚く二人。

(我が名はモモイ。宿命によりモモイは新たな主に従属する事を誓う。では所有者よ、名をお答え下さい)

「マーナだよ」

「マーナ様に力を約束する事をモモイは誓う」

「まぶしっ」

ピカッと激しい光を発し桃色スティックは消えた。

「あれ」「消えたね」

(主人よ。手首をご覧下さいませ。モモイはここにおります)

なんていうことでしょう。あのマーナの何もアクセサリーのなかった左の手首に鮮やかな金の細い腕輪があるではありませんか。

(私たちは主らにしか見えませんのでご安心を)

「マーナばっかしずるいー」

ぷうーっ と膨れるミーナ。さっきからマーナばっかしでますます面白くないのだ。

(はいはいお嬢ちゃんの番だよ。お名前は何かな)

「やったー。ミーナ。あたしミーナ」

(ミズキはミーナちゃんに力を貸すからね。約束するよん)

やる気のない様に光って消えて、次にはミーナの左手首にはまっている細い銀の腕輪。

(んじゃあモモイさん。後はよろしく)

(はあミズキさんはまったく……マーナ様にミーナ様、先程の説明の続きになりますが、私たちはメツボー国の対ウルデス帝国用の兵器として作られたのです。さて話の前にいろいろと説明をさせていただきますね)

ウルデス帝国なる国の隣にメツボー国があり、ウルデス帝国は何かあれば謝罪と賠償を求める貧しいごろつき国家であった。

それでも温厚な人たちが住むメツボー国はあまり気にしておらず余力を援助しました。

ある時にウルデス帝国の人たちは気がついたのです。メツボー国をウルデス帝国のものにしてしまえばいい事に。

で侵略されて滅亡間近に超兵器として私達が作られたのです。

ですが、作った奴がろくでなしでして、対象年齢は12歳未満に設定してるとか言い出しまして、事実そうでした。

で、敗戦続きだったメツボー国は逆転の一手もなくなり何の打開策もなくそのまま滅びましたと。

私達がこちらに流れついたのはウルデス帝国に運ばれた私達で色々実験していた所、不幸な事故で時空間の歪みに巻き込まれたので

す。おそらくその歪みの穴を作り出し維持することに成功して、そこからワルデスの侵略隊が来ているのです。

そこが何処なのかはまだ解りませんが一回その穴を閉じればワルデス帝国も諦めるでしょう。頑張りましょうね。

「よくわからないけど」「頑張るよー。ねー」

（んで私らに何が出来るかと言つとだね、ミーナ、ちよいつと『装着』と言つてくれないか」

「んー、装着？」

（ッ違うー！もつと熱く）

「装着！ー！」

（良いよッ！ー！そう！ー！もつと、もつと心から熱くなれッ！ー！熱く、熱く、熱くッ！ー！）

「装着ッ！ー！」

（ハイッ！ー！ミーナの熱いソウルがッ、ミズキっちに届いたぞッ）

ミズキの先端の一对の羽が羽ばたくように動く。この間0・05秒。

そしてミズキは発光する事0・1秒。その光が0・05秒ほどミーナの周りを飛び、0・02秒ミーナの全身を包み、光がおさまったその場にはミーナこと魔法少女戦士T-0629がそこにたつて

いた。この間0・22秒の事である。

「皆で滅殺、魔法で撲殺、マジカルリトルウィッチ・T-0629  
mz参上　　つて、いやぁー」

背中に白い羽の飾りが浮いている水色の肩だしタートルネックの  
レオタードに、薄桃色の長手袋とニーソックスに茶色のロングブー  
ツに姿を変えたミーナの姿が。

「ミーナ可愛いー。ねえねえあたしも？」

その服装が恥ずかしいのか隠すようにしゃがみ込むミーナとは別  
にマーナは自分もあの可愛い服装になりたいとモモイにせがむ。

(ええ、同じ様に『装着』と)

「えつーと、装着ッ!！」

この間0・2秒。ミーナの色違いで水色が薄桃色に、薄桃色がラ  
イトグリーンに、背中の羽はハートマークの衣装をきたマーナ。

モモイを持つ手でビシッとポーズを決め、

「皆で滅殺、ピンチは黙殺、マジカルリトルウィッチ・T-062  
9mm参上ッ!！」

キメ台詞。

(決まっていますよ主ッ!!)

モモイも感激である。

「ところで、T-0629mzとかってなーに」

（んあ、それは私たちは一応軍の備品だから、あーっと、こっちでいう騎龍隊のドラゴンみたいなもんだ。ドラゴンは国が管理しているものでしょう。）

んでドラゴン全頭を全部ドラゴンって呼ぶと困るからドラゴンのピースケだとかレッドと名前をつけて区別する。簡単に言えばそういう事よ）

（Tは作った人で、06は作成した場所。29は二十九番目に作られた作品で、mzやmmはその作品の名称です。同じくドラゴンで例えますと、Tは親、06はふ化した場所です、そこで二十九番目にふ化したmmやmzとなるのでしょうか。まあ、あまり考えず受け入れてください）

「あーい。それとあとね、セリフがーっても格好悪いの」「恥ずかしいの」

「だから変えたいの」「変えたいの」

（まあ……ミズキ……どうしましょうか）

（いいんじゃないのかな。私は賛成だよ）

（そうですね。ええ良いですよ）

「「やったあー」」

「どじょよミーナ」「どじょするマーナ」

「えーと、えーとね」

……

……

…

「勇気は力に」

「ち、力は正義いに」

「ツインリトルウィッチ・マーナ」

「ツインリトルウィッチ・ミーナ」

「愛と勇気のツインリトルウィッチ。マジカルパワーで平和を守りますッ」「」

ビシッとポーズを決める二人。マーナは満足気に、ミーナはまだ恥ずかしいのか顔が薄らと紅潮していた。

（決まったな）

（ええ。とても素晴らしいですね）

「やったねミーナ」

「う、うん……やっぱりあたしもこれやらなきゃダメ？」

「そりゃあそうだよ。だってツインリトルウィッチだもんね」

(そりゃあそうだ)

(違いありませんね)

ははははははは

こうして二人はモモイ、ミズキと共にツインリトルウィッチとして悪の軍団ワルデス帝国と戦う事となった二人の前にあらわれた三下怪人ザ・グレート・チンピラとチンピラ軍団ッ!!次々と襲いかかってくるチンピラを二人はどうするかッ!!

次回!!『強襲!!ザ・グレート・チンピラ』

正義のために、平和のために、頑張れツインリトルウィッチマー  
ナ・ミーナ



「諸君らに今日は大切な事を、とても残念な事を報告せねばならない。」

諸君らも御存知の通り我々一同は半自給自足の生活をしている。これは皆が皆の役割をはたしてきたからこそ何とかやってこれたのであり諸君らの頑張りには頭が下がる思いである。

朝も早くから農作業に出る者に朝食をつくるもの。よく遊びよく学び者にそれを自主的に監督してくれている者。家の事をしてくれる者。実にご苦勞な事である。

諸君らの食べているご飯は諸君らの、諸君らの隣のものの汗の結晶であり、諸君らの帰るべき家は諸君らと諸君らの隣のものが保持をし、また明日につながっているのであるだ。

つまりは皆が皆の為に頑張るからこそ現在の生活がなりたっているのだ。これはまさしく過言ではない。

だがしかし。しかしだ。我々のこの現在の生活を我々だけで維持できようか？ 答は否、否である。

我々は布をつくる技術はない。ならば外部から手に入れるしかないのは皆が知っていてくれてると思う。

蠟燭も、この皿も、本も、筆記具も、全てが外部より正当に手に入れた物である。

これらを手に入れるために我々は頑張ってきた。薪をつくり、炭をつくり、時には野菜をそれぞれを売って我々は手にしてきた。

飽きてきた者もちらほらいる様子であるから結論を言おう。

諸君。我々は金がないのである、と。そして塩も、小麦粉も、蠟燭も、魚もないのだ。

あと二週間分はある。だがそれは限界まで努力したならばその分はあるだろうという事だ。

つまりは君らがその気になれば一週間も持たなくすることが出来るが、そのような愚か者はいないとボクは信じている。

そしてボクはその二週間の間に生活物資を持って帰ると約束しよう。

塩を、ワインを、小麦粉を、油を、服を、生活に必要な物を必ず持って帰ってくる。

諸君らに窮屈な思いをさせる事を思うと実に胸が引き裂かれそうなほどに苦しい。

頑張ろう！！　ボクはボクの闘いを！！　皆は皆の闘いを！！

勝つ！！　勝つんだ！！　負ける要素は何一つない闘いだ！！　頑張ろう皆！！

アーオーイ！！　アーオーイ！！

「ありがとうッ！！……皆！！……ありがとうッ！！……よし、ならばボクはいくよッ！！　出稼ぎという闘いにッ！！」

湧き出る涙もそのままに飛び出したアオイに贈られる一心からの大音量のアオイコールは世が ажけるまで鳴り止む事はなかった。

あるものは声が枯れ、あるものは吐血しても声をだし続けるちびっこたちのエールはアオイの届く。

だがアオイはまだ出かけただけにすぎない。この長い長い出稼ぎ道をなッ!!

「ボクの出稼ぎはこれからだよ」

第一部完 次回作に期待しても時間の無駄ですのでクローソーしてから寝てください。

なんて事はない。

何処ぞの私塾生でもないちびっこらは吐血も声も枯らす事はなく部屋に戻り、アオイは出稼ぎ道を極めようとはしていないのだから。

そもそもこの演説は季節の変わり目事にされる為に慣れたちびっこらにとっては驚く要素は少ないのだ。

少し窮屈な思いは確かにするが食べる物が無いのではないし、家のほとんどの事は自分らでやっているから問題もまあ無い。

これは少し寂しくなるけど頑張ろうねという、儀式であるだけの話だった。

さてテキトー国で手っ取り早くお金を稼ぐ方法は不可思議なダンジョンと呼ばれる地下ダンジョンに生息する畜生を殺し、その亡骸から得られる生命石を収集。それを国営業者が買取するので売って金を得るとというのがあげられる。

もちろん真面目に商取引きや対価を得られるサービスや物を生産して生活するものもいるが、ワケアリ者には難易度が高く、当然ワ

ケアリ者のアオイはダンジョンで金銭を得ようとする。

浅い三階でも三日籠れば成人男性一週間ぐらい飲み食い出来る金を得られる。五階で一日、十階以降なら一月程は楽に生活できる程は貯めれるだろう。下れば下る程ハイリスクハイリターンである。

一階 スライム余裕でした。

地下一階 スライム余裕です。

地下三階 ゴブさんおいしいです。

地下六階 コボルトさん集団はちよつと厳しいです。

地下六階 ケンタウルスさん場違いです。消滅寸前ですけど何とか耐えました。限界です。

地下五階 コボルトさんやめて。薬無くなりそうです。

地下三階 ゴブさんイジメ格好悪い。

一階 スライムどんなもんじゃーい。

そして一週間後。

そこには各種食材に調味料、娯楽本、衣類、生活用品を沢山詰めた冒険者袋を腰に付け玄関をくぐるアオイの姿があった。

「はい、ただい……み、皆!?!……し、死んでる!!!」

「はいはいお帰りなさい」

「待ってたのー」「お帰りなさいなのー」

「やだなあ、もう。これやらないと帰ってきたって思えないんだもん。はい、これしまつて置いて頂戴ね」

「趣味悪いって」

A H a h a h a h a

その日は普段よりも豪華な食事になったとさ。めでたしめでたし

## その他と07 その他と鼻

その他01』とある日のマナミナとアオイ』

「ああ、ほらマーナ、こっちにおいで。口のまわりを綺麗にしようね」

「マーナ汚いって」「そんなことないから」

「汚くなんてないよ、汚れてるだけだよ。ほら綺麗綺麗」フキフキ

「んうー」「マーナ変な顔」

「ほら別嬪さんだ」

「本当？」「……」

「ああ別嬪さんだとも。ミーナ、次はミーナだよ」

「やったあマーナべっぴんさんだってー」「マーナズルいー」

「ミーナも別嬪さんになるっね」「フキフキ

「マーナはべっぴんさんー」「んにゃあ」

「ほーら綺麗綺麗……ところでマーナにミーナ。ボクは二人に言わなければならぬ事があるんだ」「ふきふき

「んー」「んにゅー」

「君ら二人はね、実は双子ではなくてただのソックリさんなんだよ……っとミーナも別嬪さんになったね」

「…………ええ」「…………嘘お」

「…………ごめん」

「うわーん」「わーん」「ドタドタ」

「嘘だよ。…………って行っちゃったよ」

「ママどうしてあんなしょうもない嘘つくのよ」

「セシリー、どうしてだろうかねボクは幼い子をからかうのが実は好きなのかもしれないからね」

「からかうにもからかい方があるでしょ。アレ絶対傷付くよ」

「これからフォローに行くさ。あとセシリー、あの子らが双子じゃないのは本当だよ」

「え?」

「じゃあ行ってくるよ」

「びびいし事かして」

その他02『トムとジムの日常』

「んだゴラア」

「やんのかゴラア」

「アホボケカスこのヤロー」

「んだとボケカスアホんだら」

「やめないか二人とも。で今日はどうしたんだい」

「聞いてくださいよアオイさんッ！こいつオツパイよりお尻だつて俺の事馬鹿にするんすよ。言っつてやっつてくたさいよ」

「バカにしたのはテメーだろこのヤロー」

「二人とも飯抜きで反省しなさい」

「横暴だーこの貧乳アオイー」

「そつだーこの貧尻ー幼女ボディ」

「今すぐ出て行っても構わんぞ。去る者は追わないんでな」

「」「いめんない」「」



その他03 『シオンさんは電子紙芝居遊戯中毒』

「ほお、これは何とも顎が尖っている男ですよシオンさん」

「そうですわね。そういうものですよ」

「あれ？」

「どうかしましたかアオイさん」

「この人たちって男ですよねシオンさん」

「そうですわね」

「なんで裸で、うわああ、な、なんて事してるんですかーシオンさん!!! お、男同士ですよ」

「そういうものですが、気にいりませんか」

「気になるとか気にいらなとかそういう問題じゃあなくて、変だ  
「よ」

「そうですか。ではこちらなんてどうでしょう」

「眼がとても大きい女の子ですね」

「そういうものなんですよアオイさん」

「ふーん……ってシオンさん!!! 同じパ、パターンで、や、やー、

何なんですかいったい」

「百合と呼ばれる物ですよアオイさん」

「わっ、わー！！ そんな事までしちゃってますよシオンさん」

「してますわねアオイさん」

「や、やあー」「ドガッ」

「ああ、私のノウトパソコンが」

「あ、じ、ごめんなさいごめんなさい」

「もう……良いですわ。もう一台ありますもの。このジャンルなんていかがですかアオイさん」

「もうやめてー」

07

とある日の事。私が玄関を掃除していたら空から巨大なドラゴンが飛んで来たのです。

私はたいそう驚きました。それはとても大きなドラゴンでしたもの。あの時私は丸かじりされる未来を予想してましたわ。だってドラゴンとお会いするのは初めてでしたし、牛や山羊以外の生きている

動物を見るのは初めてでしたからね。

みっともなくしりもちをついてしまった私に段々と迫り来る巨大なドラゴンの頭。ドラゴンの鼻息で崩れて行く私の髪。

そして何時でもパツクンチョ出来るまでに距離は近付いて、大きく口を開けたドラゴン。

その時に私は気がつきましたの。手に持っている竹箒は一応武器になるって。

天性の才はありませぬがちゃんばらごっこで鍛えられた身。何とかできると思いましたが……。ただまあ、今思えば何もしいよりはマシであったから無謀な行動に出たのでしょうかね。

とりあえず、まだしりもちをついていた私のただ突き出しただけの弱い突きがですね、目の前のドラゴンの鼻にスポツと。それはもう見事にスポツと入りましたの。

その時、時が止まりましたわ。ええ、誰が想像出来るの？

ドラゴンの鼻に竹箒が入っている光景を。多分、ママも、どんな貴族も、王家も、司教も誰も見たことがないのではないですか。

その貴重な光景を私はどの様な気持ちで見ていたかはお想像におかませします。ただ愉快ではなかったと言う事は申しておきますが。

さて箒ドラゴンです。私は目の前にはドラゴンがいて、ドラゴンの鼻には箒があつて、その箒は私がしっかりと握ってます。

現状は悪化してます。私の理想としてはこうです。

「なあーんちゃって、新手のギャグですよ」

「グルル（なあーんだ新手のギャグですか）」

「驚きましたか」

「グワツグ（ビックリしましたよ）」

「あははは、大成功ですね。あ、お帰りはどうぞあちらから」

「グワルル（これはどうも）グーグル（ではお邪魔しました）」

「いえいえお気をつけて」

羽ばたいて行くドラゴンとそれを見送る私。背景は夕日かな。

こうなって欲しいと私は思います。なぜそう思うかと言いますと、それが私にとって都合が良いからです。

ただ残念な事は私はドラゴンと会話出来るのかという事です。会話というのは理解です。相互に理解してそこから初めて始まるのですが、相手は巨大なドラゴンであり、私はちっぽけな人間ですからどうなのかなというのが本音で、実に残念であると私は思います。

ただそこをクリアした時に私は次のステージへとあがる事が出来ると信じてます。やれば出来る子であると、私は。

だから私は言います、

「なあーんちゃって。ギャグでしたー」

と。

「実に愉快的な挨拶ですね人間の少女さん。鼻に異物を差し込んでも謝る気持ちはないと。実に愉快的事ですね」

ええ、そうです。こんなもの何ですよ。理不尽である事を打破しようとして立ち上がってもさらなる理不尽が襲いかかるのですね。これを試練として乗り越えられるのが英雄で、私は身の程をわきまえてお死になさいということなのです。現実には残酷なのです。

「愉快な人間よ。来てもらおうか」

大きくお口を開けたドラゴンさんは歯もとんがっていてよく肉が噛みちぎれるのでしょうかと私は目を瞑りながら思いました。

「さつきから君らはいったい何をやっているのかな」

キター！ 神来た！！ 来たからコレ！！ それでもアオイさんなら、アオイさんならなんとかしてくれる。

私はその声を聞いて天にも昇るような気持ちでした。だが冷静な私はいいます。

あれ、アオイさんが来ても二人一緒に食べられるだけではないのか、と。アオイさんがちょっと強いつて言ってもそれはちいっと強い村民ぐらいの強さではないのかと。

「アオイさん、に、逃げてー」

「ミリーよ落ち着いてくれ。このドラゴンさんは君に害を与える気はなかった」

アオイはチラッとドラゴンを見て

「が、今はどうなんだろうかな。流石のボクもこれは庇護出来はないな。ドラゴンの鼻に竹箒をさしたミリー。鼻箒のミリー」

「ニヤニヤとしてミリーに言った。

「い、いやぁーッ!」

「さてうちの者がすまなかったね。怪我はないかい」

「心配無用だ」

え？

「そうか。それは良かった。鼻箒のミリー」

「え、あ、はい」

「君からもちゃんと謝るんだ」

「いらぬ。私も面白がって過剰に威圧したからな」

んん？あれ？

「ははは。勘弁してよ。こんどそんな事をやったらうちの鼻箒のミリーがその両穴に箒いれさすよ。もしくはボクがそっちに移住する。良いのかな？ん？君たちの嫌いな空気撒き散らすよ。ん？どつなの」

「あ、あの、なんでさっきから」

なんで普通に会話してるのですか？

「ああ、多分知合いだからな」

「え？ええー！？」

「ヤマモト山の者かい。そうかやっぱり。で、君が来たって事は何か進展が」

「無いんですよ。んでうちのボスがとりあえずご機嫌伺いにいってみようとなりまして私が来たのですが、まあ自分はこっちに来て収穫ありましたよ」

「おお、やったなミリーに就職先見つかったぞ。これで鼻箒のドラゴン使いミリーだな」

私の人生の分岐点は間違いなくその日だったので。もしも話は好きではありませんが、その日の玄関掃除が私の番でなかったら、さっさと逃げていれば、箒で対抗しようと思わなかったら、今の私はいなかったでしょう。おそらくどこかの村の若者に嫁いで家族に囲まれた生涯だったと思うのです。

私は知らなかったのです。

「いいかいミリー。ドラゴン使いは騎士なり戦士がドラゴンに気に入られて初めてドラゴン使いになれると言うがね、あれの半分は嘘なんだ」

「嘘って何がですか」

「気に入れられてってんは本当だが、騎士や戦士といった武力のある者がドラゴンに気に入られるのではないんだ。気に入られた人がドラゴン使いにふさわしい武力を得られるようにされるんだ」

「拒否したら」

「それは……どうなんですか」

「丸かじりだろうな。ドラゴンというんは大抵プライドが高い。それは私も例外ではない。他のドラゴンとは違って自分の事を客観的に見れる自分でも、断れられたら逆上して丸かじりしようと思うだろうな」

「でもボクがいるよ。出来ると思うかい」

「あははは勘弁してよーもう。夢なのねこれは」

「気に行った者が出来たら興奮する。すると一族にテレパシーで伝わってしまう。興奮状態だから止められないのだ。で、そのような状態であった私が一人で帰ると皆解るわけだ。断られたと。個で最も強い我々が断られたとした時、それはすなわち我らドラゴン全体が軽視されたと思うのだろう。以上の事から集落全員の敵が君を襲う。敵も味方もこの時ばかりは協力して君らを襲うだろう。集落全員でかかればそちらのお嬢さん相手でも勝つだろうな」

「ははは、それは違いますよ。あなた方二人？二匹？」

「どちらでも構わんよ」

「あなた達二だと人間なんて確実にご臨終ですよ。それが集団で来たのなら国は亡くなるだろうね。一人だったら運良く逃げられない事も無いのかな。以上の事からミリー、解ることとはなんだい。さんはい」



「も、もももすかして拒否権はねいのですか？」

「正解。だけどドラゴンさんちよっくら待って欲しいかなって。大切な家族だからね」

この時、後に伝説となるドラゴン使い“鼻の一輪刺し”のミリ―が誕生したのだ。だがそれを予感出来たものは誰もいなかった。

(ん？あれ？結局アオイさんがドラゴンの集団に勝てるのかって答えてないかな)

その他と〇〇  
その他と鼻（後書き）

08 むかし（前書き）

変更箇所

知らぬ幼児 不知火幼児

## 08 むかし

ボクはアオイである。職業はまだない。

幼少の頃から色々あった人生だと思う。

考え無しにポコポコ子供をつくっては口減らしを繰り返す両親らの家に産まれたボクも、家の伝統にのっとり物心つかぬ時分に捨てられたのである。

村全体がそうであったのだからだ。いまとなつてはよくそんなアしで村を維持できていたものだと思う。

これらの事情は前にも話したと思うから、それから少し後のことを話したいと思う。

ボクがテキトー国に来た時の事だ。

それまでのボクの世界は師匠の所とシオンさんの所しかなかった  
ので見るもの全てが新鮮だった。

女性も男性も赤毛や金髪の大柄な人たち。石作りの家もあれば木造住宅もある。

たいそう立派な街だと。これはどこの都かと感心したものである。  
広い広場の片隅に立ち、しばらく辺りを眺めていると周りから注目を集めているではないか。

これはどうした事だと暫く考えていると一人のおじいさんが近寄  
ってきて何事かを言っている。

やれ何かを伝えたいという事は理解したが恥ずかしながらその伝  
えたいことは理解出来ぬのである。

「やれご老人今日は良い天気であるな。さて何用であるか。恥ずか  
しながらも語学には優れてはいない為にとんと理解出来ぬのだ」

「?ペラ?ペラペーラ」

老人も理解出来たのだろう。相手には言葉が通じていない事に。言葉が通じている限りは言葉が通じてないという事をしらない、という事を互いに認識したであろう。

当たり前前の事が重要なんだ。

「ペラペーラ」

ふむ。どうやらこの老人は私についてきたまえとジェスチャーで表しているようだ。

指の先にはえらく派手なガラスの建物であり十字の何かが屋根の上に乗っかているおかしな建物である。

そこにボクを、この御仁は連れこもうとしているのだろう。

なに。確かに見た目は子供であろうと中身はこの老人に負けず劣らず生きてきているのだ。どうにかなるだろう。

それに知らない人について行ってはならぬと教えられている。まさしく知らぬこの老人に付いて行くわけにはいかんのだ。

ボクは首を横に数度振り後ろを向いた。いつの間にか人で囲まれておるが邪魔なものだ。

ボクは歩いて行く行動でそこをあげると示したかったが邪魔をされた。

歩き出そうとしたその時に左肩を掴まれたのである。やれ。何するものかと再度振りかえると老人の仕業であった。

「ペラペラ?ペラペーラ」

それにしてもこの老人解らぬモノである。互いに言葉は通じぬ事

を知りつつ喋り、意思を行動で示したにもかかわらず邪魔をするのである。

この老人は相当な頑固者に違いあるまい。

ボクは手をはらい、再度方向転換するとまた肩を掴む老人。

また手を払うと老人は負けじとまた肩を掴んでくるではないか。

えらくしつこい老人である。

この老人はさびしいのであろう。頑固故に街の者から誰も相手にされず、一人色とりどりのガラスを作り、時々現れるであろう何も知らぬ幼児を家に連れ込んで街の者から偏見をかい、ますます誰からも相手にされぬ毎日に違いあるまい。

でなければ自分一人にどうしてこんなに構うのか。

充分気の毒ではあるがボクも暇ではない。変態ジジイの相手などしておられぬのだ。

何度も同じ事を繰り返すうちに、だんだんと怒りが芽生えてきた。いかげんにしろこの金髪糞豚野郎、と口にでたのもしょうがないのだ。

不思議な事に悪態については時に言語のかべを超えるものなのだ。若い時分には解らなかったこの事も長い年月を経て知ることが出来たことだ。

悪口を言われたのだと理解した金髪糞豚野郎はボクの頭に重いげんこつを一つ落とし、痛みで気が緩んだボクの両脇に腕を入れて引きずって連れていくではないか。

勿論おとなしく引きずられるままのボクではない。貞操の危機であるかもしれぬのだ。脚を振ってみたり、腰を低く力をいれる等の様々な抵抗はしたが意外と力持ちであるのか無駄であった。ボクが

軽いという事もあるのだがね。

そして老人にされるがまま連れ込まれたボクは観念した。知識としてしか知らなかった事を無理矢理実践させられるのは恐怖である。望むのであれば回避したいが無理そうである。

人一人もおらぬ広間を抜け、奥にある足の長い卓袱台が二つとこれまた長い四つ足に背もたれのついた木製の何か八つあり、そのうちの一つにボクをおろすと老人はさらに奥の部屋へと向かって行った。

この不思議な程に足の長い卓袱台は、四つ足の上に座り使う物であると賢いボクはすぐに理解した。

この四つ足は脚が落ち着かぬ物であるとボクは思った。テーブルとイスと呼ばれる物であるのだがこの時のボクはそれを知らなかった。

さてこの部屋には今は自分一人であるのだ。しめしめ気の緩みは注意がひつようなのだよと思いつながらボクは二本の脚で床に立ち、今きた所から帰ろうと思ったなら金髪糞豚野郎は帰って来た。

手には茶色い丸っこい物と木のお碗を持ってである。それをボクの前に置いて、金髪糞豚野郎は手を口に運ぶ仕草を繰り返した。

どうやらこれらを食べると主張しているのであろう。どのような意図で食べさせたいのかは解らないが、そこいらの毒は効かぬ身である。食材も勿体ないことであるし食べようかと思つた所でさて困った。

自身、乳飲みであつた時を除けば果実そのままか粥か雑炊しか口にしたことしかないのだ。お碗の方は汁物であるからこのレンゲの

出来損ないですくって飲めばいいのである思われるが、もう一つの茶色丸っこいのが問題であった。

とんと理解出来ないのだ。はたしてこれは食べ物で良いのかと。もしかしたらこれらは顔を洗うものではないのか。この茶色丸っこいのは顔の水気をとるものということも考えても良いのかもしれない。

困ったボクは顔をあげると老人は茶色丸っこいのを一つ手に取り、半分に割るとちぎって口に運んだのである。

やはりこれは食べ物であったのだ。ボクも老人にならない茶色丸っこいのをちぎって口に運んだ。

うん。口にあわない。汁物はどうかとこちらも口に運ぶ。

うん。しつこい味である。口に残る。

どちらも有害なモノは含まれてはいない様であるが油断は禁物である。

「ペーらペーら」

先程から食べている最中にこのご老人は。少し黙っていらいたいものである。

モノを食べるときは誰にも邪魔をされずなんというか救われてなければならぬモノなのだ。

独りで静かで 豊かで

「ペーらペーら」



味わえなかったじゃないか。せつかくの食事を味わえなかったじゃないか。

ああ、もう。ボクはゆつくりと食事を楽しむ。それだけでよかったのに。この金髪糞豚野郎は。

「御馳走様でした」

だけれどもご馳走になったのは事実。ありがとう金髪糞豚野郎。両手をあわせて感謝の気持ちを伝えると前に座っていた金髪糞豚野郎に通じたのかニコニコしていた。

予定通りこのあとボクを汚す予定なのだろうか。

食事をご馳走になった事とそれは別の話である。

そんな事に付き合う気は毛頭ないのでボクはここからでようとする。

すると老人がボクの肩を押さえつけてくるではないか。

痛い。痛いのである。

「痛い！痛いですから」

「ペーラペーラ」

老人はその身に似合わぬ俊敏さでテーブルを飛び越えてボクをここに連れてきたように引きずり水浴び場であろうか。そこにボクを放り込んで行ったのである。

もう抵抗は何の意味もない。ボクはあの老人に勝てはしないのだ。水で身体を清めて出ると先程の広間に大小様々な子供と老人がいた。

「ペラペラ〜ペラーノ」

「へらへら」

「ペペポペパペパ」

一年後。

あの老人は幼児愛好家ではなく宗教牧師であり、ついでにこの街で孤児を保護しているらしくてそれにボクも間違われたのであろう。確かに今思えばそれもしょうがない事なのだ。

さてボクではあるがこの国の言葉は難しくはなければ問題はないぐらいには喋れるし読み書きも出来るようになった。

礼拝にやってくる旅人から旅の知識も得た。

街でお手伝いをして貯めたお小遣いも近くの村に片道分なら問題なく出来るであらう分ぐらいはある。

足りなければ足りないで何とかなるだろう。次の事は次でその時考えればいいのだ。

ボクは孤児院をでることにした。

## オマケ完結と8・5

「へっへっへ。骨が折れちまったようだなあ。いてーなあおい」

テキトー国とソレナーリ国を結ぶ道にチンピーラが表れ、罪のない商人を脅してるぞっ!!

出番だミーナマーナツ!!

が……ダメツ!! 間に合わない……ッ!!

チンピーラが暴れている地点までどんなに急いでも30分

身体も洗いたい……ッ!! オヤツも……ッ!!

食べたい!! ……否ッ!! 食べるッ!! 食べるんだッ!! 必

ず……ッ!!

蒸した芋だ……アツアツの蒸した芋に

塩とバターをのっけて……食べる……ッ!!

静かで……豊かで……なんと……救われなければならな

いんだ……ッ それも圧倒的に……ッ!!

後悔する……食べなきゃあ後悔しちゃう……

「ククク……OKイモだ 蒸そう」

そのイモは身をよじるように蒸されるという

ツインリトルウィッチ』一話 予定を変更して、お芋ミッドナイ  
トちっくをお送りします」

お芋と出会ったのは 私たちがココに来てすぐだった  
お母さんもお父さんも近くにいない  
一人残して捨てられたんだと気づいた  
そんな時 私たちはもう一人のお母さんに出会ったんだ  
不思議な 人だと思った  
なんとというかテキトーな人だつて  
その人は言った 迎えにきたと

二人抱きかかえられて その人は悪魔の山の上へと進んで行った  
怖かった 悪魔に食べられると  
その時 ふと思った  
この人が悪魔なんじゃあないのかって  
私たちを食べる気なんじゃあないのかと  
そうなると素直に抱きかかえられる気分じゃあなかった

おろしてくれ  
だけどおろしてくれない もう一人もそうだった  
姉妹だから 血を分けた姉妹で もう一人の自分も同じ考えにた  
どり着いた

流石に二人同時に暴れるとお手上げだったんだろう  
私たちは落ちて それからすぐに逃げた  
でも すぐに捕まった  
捕まった理由なんて簡単だった  
スタミナ 足の回転 なにより相手のホームだったというコト

私たちはそれからガツチリと捕まえられて家に着いた  
そこで出会った  
冷めた芋だった 蒸しが悪いのか芋が悪いのかベチヨベチヨで  
上手に出来たとはとても言えない芋だ

「ただど美味しかった  
ミリーお姉ちゃんが初めて作ったおやつ  
の残り物だというそれは  
とても美味しかった」

「おいっまだ隠しているんだろ！！ジャンプッ！！」

「ひー勘弁してください」

それから何度となくお芋と出会った

「ただど あの上のお芋とはまだ出会えてはいない」

「あのお芋を もっとお芋を」

「モアお芋 モアおやつ」

「もっと もっと 私に お芋をください」

「出来たよー皆」

「やったー」「わー」

「お芋だ このお芋だ」

「今度こそ出会えるのか お芋」

「おいしかったね」「ねー」

「ねえマーナは焼いたお芋と蒸かし芋どっちがすきー」

「うーんと、蒸かしたのー。ミーナは」

「焼いたのー。蒸かしたにはべちよべちよだもん」

「えー、ミーナ変なのー」

「マーナの方が変だもん」

「「ならどっちが美味しいか勝負だ」」

「セシリーお姉ちゃん、お芋ちょうだい」

「もうないわよ」

「違うの。生のお芋が欲しいの」

「何に使うの。食べ物は遊び道具じゃあないのよ」

「ちーがーうーのー。あのね焼き芋が美味しいの。だけどマーナは蒸かし芋だから勝負なの」

「蒸かし芋のが美味しいの。ミーナは変な子なの」

「ちょっと二人とも。もうお姉ちゃん二人が何を言っているのか理解できないです」

「こつこついう事だろ。マーナは蒸かし芋のが旨いと思うけど、ミーナは焼き芋のが美味しいと思っている。だからマーナは蒸かし芋の方が美味しいとミーナに教えたい。だから芋をちょうだいと。ミーナも同じで焼き芋作りたいから芋をくれ。そうだろ二人とも」

「ジム……よくわかるわね」

「精神的に似てるからじゃね」

「うるせーよトム。で、どうすんの」

「んー……芋はいいんだけどさ」

「やったー」「やったー」

「火を使わせるとなるとさ考えちゃうよね」

「この後はしばらく予定ないからさ、俺たちがついているから大丈夫だよ。な、二人ともそれでいいだろ」

「……まあ……うーん……」

「大丈夫だつて。悪ふざけもしねーし、な」

「おつよ」

「不安だけど勝手にやられるよりかはいいか。良いわよ二人とも。ただとお兄さんたちの言うことをよくきいてつくるのよ」

「はい」「よろしくお願いします」

蒸かし芋

「よーし、マーナ隊長殿。蒸かし芋部隊員ジムに指示を」

「えーっとね」

蒸かし芋をつくる

それだけのコト されど蒸かし芋

蒸らすタイミング 水の温度がピークをむかえると同時に芋をピ  
ークに達する

それがベストだ

遅すぎると過剰にねつとりと 早すぎても生焼け

そうやって苦労して得られる蒸かし芋 それだけだ

歴史に残るコトはない だけど記憶に残る

あの日 焼き芋と戦った この蒸かし芋

おいしかったね と

それだけで充分 充分だ

だから水をくんできてくれ ジム

## 焼き芋

焼き芋は蒸かし芋に対して手軽じゃない

かまどに火をつけ 鍋に水と芋を突っ込めばいいソレに

野外で燃料を用意するところから始めなければならぬ焼き芋は  
確かに手軽じゃない

だけどそれがどうした

焼き芋なんだよ とびっきりの芋をいかす とびっきりの落ち葉  
でつくる焼き芋なんだよ

直火でも 蒸焼きでもない 近火からじっくりと熱を通し

ギリギリ パサパサラインまで持って行く



美味しい焼き芋をつくるコツ それはトライ&amp;エラーを  
いく度となく繰り返して

トム兄さんの組んだかまどでつくる焼き芋なんだ

オールホクホク TRY

「チンピラくんが馬車にひかれたでヤンス」

蒸かし芋

水……OK

鍋……OK

水温……オールクリーンだ

近年稀にみる好条件だ。いけるッ

お芋投下ッ！！

「あっ、もう沸いてたから芋入れておいたよ」

焼き芋

焼き芋ってのはわさ いつだってあたし達の味方なのヨ

芋を焼けば ハイ出来上がりってな

簡単に誰でもうまくつくれる

皆でワイワイやりながら芋を焼いてサ

ちよっぴり焦がしすぎたりなんかして 案外たのしいのよ コレが  
だけど あたしはもうそんなレベルじゃない

どんな状態でも 最高の焼き芋にしあげなければ満足できないんだ  
火加減と芋の質量というバランスを当たり前にキチツとしていく  
とりつかれてしまっている 焼き芋という麻薬に

「火おこしといたから芋突っ込んでおいたぜ」

「ちょ、タンマアアアアーツ!!」

「……」

「……」

「どうしたのよあなた達。お姫さまたちご立腹じゃないの」

「いや芋入れたら怒った」

「こっちも」

「？」

色褪せて行く あんなに輝いていたお芋が 急激に色褪せて行く  
熱に近づけすぎたお芋は皮を焦がし 水分を過剰に奪って行く  
外がガリガリになったお芋は二度とホクホクにはならない

繊維質が溶け出していく 熱によって溶けた繊維質にお湯が入

って行く

ベロベロになったお芋は二度と答えてくれない

お芋ブローの予兆だ お芋がふくれあがり 最後に答えてくれた  
限界だと

答えられなかった お芋のアプローチに

案の定のお芋ブローだった

残ったものはただ一つ 忘れない この敗北感を……

「これがマーナのお芋？ねっちよりしてておいしくなーい」

「これがミーナのお芋？ボリボリだねー」

「むむー」「むうー」

「チャンバラで勝負」「望むところだよ」

「……ところでミーナ。モモイたち知らない？」

「あつ……焼き芋の燃料に……しちゃった」

一部完

先生の次回作に御期待ください

それから色々あってトチノ山についたんだよ

お金節約の為に密船して、密入国して、トチノ山で一人暮らししてさ。

だんだんと野生の獣は減るわ、子供が放置されているではないか。けしからん事と嘆きながら保護しておつたら、

いつの間にやらこんな殊になっておるではないか。

さてどうしてこうなったと考えてもあとの祭りである。

過去は振り返るなと先人がもうしたようにボクもそれにならおうではないか。

であるからボクはいまでも子供を保護しているのだ。

## 09 山頂ミッドナイト

すこしでも節約したくて燃料追加なし  
それがアダになった

風呂に入る時 ふと水温の事が気になった  
ちびっこのら長風呂にたいして水温はどうかな……と  
だけど誤魔化した 問題ないだろうと自分に都合よく言い聞かせた

やっぱり水温は低下していた  
完全なぬるま湯だ

あまりにも稚拙なミスだった  
たしかにわかっていたんだ……あの時

だけど誤魔化した  
はやくフロに入りたくて自分の心を誤魔化したんだ

残ったモノはただ  
ぬるま湯にふるえるボクだけだ

「ヘックシ」

「風邪をひくのは体調管理が悪いからでしたっけ」

残りのスूपをあたためるセシリーが意地悪そうにボクに言う。  
たしかに言ったよ。

風邪は体調管理の出来ていればひくことはないって。

「だから言ったじゃないの薪入れたらって。それを、いいやいらな

いって言ったのはどなたかしら」

「そう責めないでくれよセシリー。なあにかえって免疫力がつくさ」

「はいはい。どうぞ」

そういって彼女は木のお碗にスープをよそってくれた。湯気をたてるスープの中にはすっかり小さくなった味のしみた野菜が浮かんでいる。

今日の、ついさつきも食べたコレ。正確には昼も朝も昨日の晩もこのスープをいただいた。昨日の昼も朝も同じ具材の同じ味のスープが食卓にあがった。

「ありがとう。いただきよ」

ボクは彼女に感謝の意を表し、スプーンで一口。

うん。このちょっと冷えた身体にあったかいスープ。うん。うまい。

どおれ、味のしみたニンジン……これはキノコ……おほっキャベツだ……どれもいけるぞ。

どれもまた口の中でよくとけ、大変おいしいです。ありがとうセシリアさん。

「ごちそうさま。……いい子のセシリーにはマーナを愛でる権利をあげよう」

「遠慮しときます」

「そうかい」

残念だ。

翌日、風邪でもひいて頭が痛くなるかと思っただらそうでもなかったぜ。

スープレ様々だぜ本当。

「えー、皆さんにお知らせがあります。食事の手は止めなくてもいいのでそのまま聞いてください。

先日、お風呂に入浴したんです。お風呂。

あの浴槽に一人、足を伸ばして入浴をしていたんです。

そしたら気がついたのです。あれ？意外とこのお風呂窮屈だぞ、と。

お風呂というのはそういうものではありません。

お風呂というのは、癒しで、ゆとりで、日常なのです。

一日の疲れを明日に持ち込まさせない、身体の老廃物を昨日に置いてくる。

ゆったりと、急がず焦らず、湯に身を任せる。

それがお風呂という本質であります。

現状はどうかと言いますと、これはどうやら違つぞと。

いまさら何を言つかと思われませんがようやっと風呂という物を認識して、偽物を使ってもらっていた事は反省しなければならぬ事でした。

ボクは反省出来る人です。素直にごめんと言えます。皆さんごめんなさい。ボクはこれから本当のお風呂を皆さんに用意したいです。

そのために暫く留守にします。

ですから皆さん頑張ってください」

そう言っただけで、ボクは着席をして皆の反応を見たけど、まばらな拍手がかえってきただけで、ジムもトムは大食い競争に熱中していて、ミーナマーナは食事に一生懸命で、セシリーはそんな二人が汚す口の周りをキレイキレイしていて、つまりは誰もろくに聞いてはいなかった。チクシヨウ。

第一回テキトー穴掘り大会イントチノ山なんだよね。

まあ、嘘なんだよね。

シロートがさテキトーに穴掘って温泉湧いて出てきましたってならないのヨ

ましてや一人 ますますムリだわな

じゃあ温泉は諦めるのかと言うとそれはNOだ

掘るだけが温泉じゃない 別のアプローチ

それは湧き出る源泉をさがす

あたりはつけてある やや離れたところにある川

アソコで勝負なんだ

硫黄の臭いはいつだって硫黄の臭いだ

だからこそ そこに温泉源泉があると思う



それは間違いじゃない　ボクは温泉をつくる  
そして二度と湯冷めはしないんだよ

勝負　勝負なんだコレは  
プライドをかけて　必ずボクは掘るッ！！

食後。

ボクは物置からあるものを取り出した。

ツルハシ　…　OK

スコップ……　OK

穴あき硬貨に針金二本もOKだ。

井戸掘り三点セットだ。

固い土はツルハシで、そうでない所はスコップがいきってくる。

針金や穴あき硬貨は水脈を探す時、一番に力を発揮する。

お弁当に水筒……　オールOK

天気良好だ。これは絶好のピクニック……違う。温泉探し日和だ  
ね。

「OK　行って来ます」

「行ってらっしゃい。暗くならないうちに帰ってきてねー」

「……ああ、うん」

あれだね。理解してもらえのは悲しいよね。

何もせずに理解してくれというのもアレだけどね。

まあ、ぼちぼち、行きましようかと、そうしましようって。

うん。なんとというか、遭難というか、迷子というのでしょうか。一心不乱にさ、針金持ってあっちにこっちにとさ、動いていたら見覚えのない風景なんですよ。

いやこうなるなんて誰が予想できたのかな。普通、普通の人はこんなことにならないでしょうね、と。どうしたものでしょうねと思うのは簡単ですけど、じゃあ実際に帰るとなると難易度はグーンとなるよね。

今きた道をそのまま引き返す。できたら楽なのですけど、いかにせんボクは道を覚えてはいないぞ、とそうなるのですよ。

ですから現状ではボクは迷子なんですけど、それってどうなのとも思うわけです。

君が思うよりもボクは大人だと。やれアレしたから、できたから、だからボクは大人だという青二才の若造の様な主張はしません。

だからボクはボクを迷子と定義しないで欲しい。

大人だから迷子にならないという固定概念を捨てて、ボクはボクを新時代の彷徨い人と呼びます。

新時代の彷徨い人は迷子ではありません。

何かを求めているのです。ボクはそれが温泉だった。そういうことですよ。

ところで何時までも現実逃避していてもしょうがないよね。

する事は一つ。帰宅するんだ、それだけなんだよね。

出来る出来ないじゃなくてボクは帰宅するんだと。

「お母さんがいないよー」「お、おかー……おかーさーん」

「お腹減ったね」

「……」

「ねえ……トム、ジム」

「……」

「し……しんでるッ!?!」

こうなる前に帰らないと行けないんだよね。  
もう温泉がどうのこうの言っている場合じゃあないんだよね。

とりあえず、ここはボクの住んでいる山ではござらん。  
して、遠くに見える山脈。左前方に一つと右後方に一つ。  
針金微動だにせず、水の音も聞こえない。

これからわかることは村か集落がどこにあるのかはまだわからない  
ということですね。期待値は薄い。

動く……か。

「おや、お嬢さん。こんな所で何をしているんだい」

人だ!!おじいさんキタ!!キタおじいさん!!これで帰宅出来る  
期待値大だあ。

「こんにちは。いえ、なに、温泉をさがしていたら少々新時代の彷彿

徨いをする事になってしまいました。帰宅したいのですが、ここはどちらでしょうか」

「ほう……新時代の彷徨いですか。そんなにお若いのに珍しいですな。私も昔はよく彷徨ったよものでな。どうでもいいか。ここはノーレス平野ですよ」

「ノーレス平野？ですか」

聞いた事ねーですよ。そんな平野。

「うむ。ノーレス平野。であっちが首都、反対に行くとノーレス村につく」

「あのここは何処の国でしょうか」

「うん？テキトーじゃけども何か」

テキトーにノーレス平野なんてあつたっけかな。

「……ああ、すまん。ノーレス平野なんて正式な名前じゃあないけんの」

「そうですね。ありがとうございます。ところでそのノーレス平野と呼ばれる由来は」

「ん。それは不思議とおかしな若者がここで保護されてなほんずなしの平野がいつしかなまってノーレス平野になったと。かくいうワシもそのノーレスでの、いつの間にかここにいたのを保護されたんだよ」

もしかして

「失礼ですがおじいさんのお名前はビリーといいませんか」

「あれ？そうだけど、名乗ったっけかな」

「いえ、なんとなくそれっぽいかな、と。すみません。失礼しました」

やっぱり。ここはボクがよく元子供を置いて行く場所だよ。  
昔の子供と会えるなんてなんて偶然。

「あははは、それっぽいか。まあたしかにそれっぽいと自分でも思  
うけどな」

「ははは、すみません本当に」

「ところでお嬢さんとは一回どこかで……うーむ、きのせいかな。  
なんかどこかであったような気がするのじゃがなあ」

「きのせいですよ、きっと。すみません帰宅を待っている人たちが  
いるので失礼しますね。ありがとうございました」

「いえいえ、なんのなんの」

ボクはおじいさんにお礼を言い急ぎ足で首都への道を進んで行く。  
おじいさんが完全に見えなくなるまで。

それにしても本当にまいった。まさか会う事になるなんて。

記憶ちよいつと弄ったのに思い出しそうになる……し……。

……思い出して欲しかったのかも。

普通言わないよね。思い出して欲しくなかったら。なんでだろう。矛盾しちゃっているよね。思い出してほしくはないから弄って、でも思い出して欲しいだなんてさ。

「おかえりなさい。温泉見つかった？」

「うんにゃ。見つからなかったよ」

「そう残念だったね」

「そうだね」

温泉がみつからなかったのは残念だと、温くなったお風呂でボクは思った。

## 09 山頂ミッドナイト(後書き)

湾岸の平本編、黒木編が好きです。最近のは知らないけど。

## 10 赤い靴が異人さんで

大人も眠りにつく真夜中の空を覆う巨大円盤浮遊物。

雲の隙間から見え隠れするそれは赤や青の光を点灯させながらゆっくりと下降し、800m程の高さで止まった。

シンリヤーク号。それがこの巨大円盤浮遊物の名前である。

最大収容人数六万人と宇宙船の中では最大級であり、長い時間も豊富に用意された娯楽施設で飽きのないようになっている。

そのような宇宙船がなぜにこんな所にあるのか。

時はテキトー大陸共通時間でだいたい千年前。

宇宙の片隅にある惑星ワーンパタンは侵略されていた。

ワーンパタンにあるデゴメン帝国やナサイ連合、グーダグダ連合もその時は協力して迎撃に向かったが、その時までには互いに争っていた国々だ。

やっぱりまとまりに欠け敗戦続き。どんどんと占領されていき残すはナマグサ神国だけとなった。

「ナマグサ神国が健在なのは我らが神ゾクセーケンマミレ様のおかげである」

この発言が、負け戦に、疲れていた、人々の、藁にもすがる思い入りこんだ。

残ったのは脅威で無かったから後回しにされただけであると皆理解していたがもしかしたらと思いい人々は集った。



まずガリは金を集めた。金の無い者は物を、労働力を。そしてそれを使い物資を集めた。食料、兵器、金属だ。

集まった物資で宇宙戦艦をつくれるだけ発注した。材料は持ち込みで、足りない分や賃金は敗ければどうしようもないからとサービ  
スで。

職人らも集まった人も皆の協力のもと出来たのが反撃用超宇宙戦艦十五隻である。

侵略されるぐらいなら皆で反撃しよう。

そう言っ  
て当時残っていた人口の四分の三が反撃作戦に参加した。大人も子供もお姉さんもだ。

結論からいうと作戦は失敗したが成功した。

反撃作戦は失敗したがうらのもう一つの『神官のためなら死ねる』作戦が成功だったのだ。

大スポンサーとナマグサ神国のお偉いさんに美女や職人らを乗せた五隻は無事に離脱出来た。

こうして彼らは戦域を無事に突破し、安住の地を見つける旅人となりこの地にやってきたのだ。

「ふーん。で」

「ペペポパポペポ」

「うんうん」

「ペーポパポパポ」

「何言っているかわかんねーっすよ」

場所は所変わってトチノ山山頂付近にあるアオイハウス。食堂にアオイとトムと異人さんの男女一組が椅子に座って対談している。それを食堂の扉前で盗み聞きしているちびっこたち。

「……うん。なるほど」

「わかるんすかアオイさん」

「ペポ！ー！」

「ああ。わからないという事がわかったぞ」

「ペペ？ペペポ」

「うん。そつだ。わからない。実にわからない。トム安心してくれ。ボクも理解できない」

「ペポペポー」

「あつー！今ちよびつとだけど理解出来たかもしねやせん。ほんのちよっぴりですけど。いいっすかいつちやても」

「発言を許可しようトム君」

「そのちんちくりんちよいつと表にでろ」

「ペポーツー！」

やった！！少し、ほんの少しだがやっと理解された。  
長かった宇宙船の旅もようやく終わらせる事が出来るかもしれない  
と思います、このシューチ・ニクリン幸福絶頂であります。  
と異人男シューチ・ニクリンは喜んだ。

「俺が可愛がってやんぜ仔猫ちゃん、と今言いました」

「!?!」

言っていない。そう言おうと思った。

だけどそれは理解されるのだろうか、と男は考えた。ちよつと一瞬、そんなことを考えてしまった。

それがいけなかった。この少年はわざとやっている。そしてそれは正解じゃない。

すぐさまに否定するべきだったのだ。理解されるされないは別として否定しなければならぬ。

そうしないと大変な事になる。というか大変な事になっている。隣で、嫁が、般若顔をしている。嫉妬深い嫁が勘違いヒートアップを始めている。

「……ペポー」

最低。後でお話がある、と嫁は今言った。

ならばきつと明日は……大変だ。そうに違いない。

「……実に最低だな。ボクもそう思うよ。君も気の毒に」

「ペーポーペポー」

「慣れている、か。それはそれで気の毒でもあるな……あいにく喧嘩はお断りなんだ。そういうのならなおさらね」

「ペポペポーツー!!」

男はようやく否定したが時既に遅し。

嫁の中では女性を、嫁の前で誘った男となってしまうている。今晚も大変だきつと。

「だが、まあ、喧嘩はダメだと言った。たしかにボクは今言った。

だけど、勝負ならまあいいよ。勿論肉弾戦はお断りだからね」

アオイはちよつと考える素振りをみせ続ける。

「そうだね。料理勝負といこうではないか。ボク対君らのどちらかだ」

「ペツポ」

「上等だ。かかってこいやあ、と言ってます」

熱い火花を交差させ、異文化対決が実現となった。

「今から30分だ。場所や材料は適当に使ってくれ」

異人嫁は厨房に入り食材を探した。

だが宇宙船産まれ、宇宙船育ちの彼女らのの食事は栄養ゲル。それ以外は見たこともなかった。

サラサラの砂状の物やしっとりした粉。新手的トリップ薬？  
現地民恐ろしい現地民マジ恐ろしい。塩や小麦粉を勘違いで異人  
嫁は恐怖した。

彼女は恐怖のあまりとち狂った事を始める。

シンリヤーク号内DBに脳内に埋められているワーンパタンチップ  
プを使いワーンパタンアクセスし、『ドラッグ レシピ おいしい』  
とワーンパタン検索を行った。

この間0.021秒。

そして偉人女に結果がワーンパタンダウンロードされ、偉人女は  
素敵でとつても凄いスーパーナマグサ人となる。

スーパーナマグサ人はゲル以外を摂取しても胃腸が大丈夫なのだ。  
具体的に言うとスーパーナマグサ人なら消費期限切れゲルも一ヶ  
月は余裕で大丈夫なんだぜ。凄いや。

「ペポッ！！」

スーパーナマグサ人となり知識を得た異人嫁は包丁を片手に調理  
場という戦場へと突撃した。

数分後、指に切り傷をつけた彼女の姿が見られた。

そして一時間後。

食堂にあるテーブルには料理が盛りつけられた皿と何ものつてい  
ない皿を目の前にした二人の男の姿があった。

「ペ。ペ。ペ。ペ。」

「これは私たちの国の先祖がおもてなしとしてだしていたといわれる物です。あつたかいうちにお召し上がりください、だそうです」

「……食べれるのかいコレは。まあ、失礼だけでも拒否してもいいんだよ」

「鉛球ですよ。おもてなしに鉛球って、違うんじゃないのかな」

皿の上にはあつたかい鉛の球とレタスをちぎったものに彩としてブロッコリー、ミニトマトが飾られ実に食欲をそそられる一品だ……たら良かったのに。残念だとトムは皿の上のミスマッチな一品を見てそう思った。

「ですよね………すいませんが………」

「ペポッ！…ペポペポッ！…」

「ああ………そちらは空の皿でした。お怒りですよ。どういことだって」

「料理は愛何だよ。つまりこの皿には愛が、ボクの愛が乗っかているんだ。さあボクの愛をどうぞ」

「……ペポー………ペポッ！…」

ハム、ハフハフ、ハムッ！…

「………マズッ」

「マズイと言ってますけど」

「そう。そのボク的愛は確かにマズイ。何でかッ!!」

それはボクより君を愛している奥さんッ!! 貴女ですよ犯人は」

「ペポッ!!」

「ペポッ!!」

「ヨシコさん……タカオさん……と申しております」

こうして第一回料理対決はアオイの勝利に終わった。

真実の愛に気がついた二人は大人しく宇宙船へと帰り再び銀河へと旅立っていく。

異人の澄んだ瞳に生命の炎が燃えていた。

きつといつか彼らも出会うだろう幸せの青い小鳥に。

## 11 ワスレテタワー一階

朝、起床しますとそこは草原でボク一人でした。

ははーん、これはアレだな。シオンさんが言っていたテンプレというやつだなと思ひまして、そう思ったボクが目の前にある凄く巨大で黒光りする塔に入っていくのも不思議ではないのですよ。

大きな塔に相応しい大きな両扉を押し入るとエントランスも広く中には一人だけがいるではないですか。

「お邪魔します」

挨拶もなく無断で侵入してしまったのが見つかったボクは悪戯が見つかってしかられるのだけどそれが嫌だから言い訳する子供の様な気分になり、とりあえず挨拶をしたのです。

「久しぶりだな」

この人は今久しぶりだと言われましたが、ボクにはこの人が誰なのか皆目見当もつかないのです。

久しぶりだということとはあちらには見覚えがあるのでしょうかね。嫌です。本当に嫌なんです。ええ。

失礼極まりない自分が本当に嫌になってくるのです。

知っているふりをしてもすぐにボロがでてしまうのですよね。ですから正直だと、正直に言うのが最善だとボクは思うのです。ですからボクは言います。

「すまないがどなたでしょうか」



と。

目の前の、声は男であるから仮に男としましょうか、男はそれも予想していたのかのでしょう。

「俺はドナドナ。飛竜のドナドナだオラァー」

ドナドナ……。ああ思い出しました。というか教えてもらったのですが、思い出しました。

「ああ、ヤマモト山のドナくんか。久しぶりじゃないか。元気にしていたかい」

「うるせータココラッ！！エー、オイッ！！」

何か気に触ったのでしょね。ドナくんはシューシュー言いながら手を激しくクロスさせたかと思うとふりおとし始たんです。

それは何かの儀式なのでしょう。もしくは飛竜属の何か。知らない事がまだまだあり世界は広いという事を痛感した次第であります。

「くらえ空中モンゴリアンチョップじゃタココラ」

と意味不明の言葉を発しながらドナくんは手を振り上げたまま飛びかかってくるッ！！

襲われているとようやく認識したボクはとりあえず眼を瞑ってしまつという避けるでも身構えるでもない事をして待ってしまったのですが、

ドタツと重い音がして、それから暫く眼を瞑ったままでしたんですけど、想定していたものが来ません。

ですから、恐る恐る眼を開くと床に寝っ転がるドナくんがいるではないか。

正直、どうしたのかと思う自分です。大きな声では言えませんがボクは聖人君子ではないのです。

ワルツにはワルツを、タンゴにはタンゴ。汚物は消毒です。邪魔をするものは適切に処理をしなければなりません。

「おんやあ、ドナくん。それが君の言った空中モンゴリアンチョップとやらなのかい。ねえ、ふーん。空中モンゴリアンチョップねえ。チョップの欠片もない芋虫のそれが空中モンゴリアンチョップねえ」

「た、助けて」

「えっ？何？助けて？助けてって言ったの？今。」

ダメッ！！ダメだよ！！全然駄目ッ！！

そんなんじゃあ助けようって気にならない。

ほらもう一度ッ！！心の、腹の底から、助けてって！！思いをのせて言うんだッ！！

助けてって！！」

まあ、そんな事を言ってもボクも鬼ではないのですよ。ですから、まあ、助けて、あげようかなとも思っただけですね。

「じゃ……もういらねえ、タココラ……ッー」

「ドナくん？冗談は顔だけ……し、しんでるッ！！」

勇敢な飛竜の戦士ドナドナ　ここに眠る。

ボクはそつと手をあわせ塔からでようとしたらどこからともなく不思議な声が聞こえてきたんです。

ここから出るなんてとんでもない、って。

それを聞いてボクはイヤだなあー、面倒だなあなんて思ったその

瞬間

あるんだッ！！さっきまで無かった階段が奥にあるんだッ！！

それを見つけた瞬間ボクはとりあえず階段を上りましたよ。

いやあー、構造上不可能を可能にしてるなんてあるもんなんですねー。

## 12 ワスレテタワー二階

長くない階段をのぼると、そこは雪国ではなく二階なんですよね。だがちよつと考えると、ここが二階なのかという気持ちもあるのですよ。

おや、ボクは地下一階から階段をあがって一階にきたのではないかとボクは考える。すると話は違います。

さっきまで一階だと思っていたものが違うという事なんですから。地下ですから当然地面の下にあると考えていたのですよ。つまりは反対側ですね、そちらの方はとかかんがえていた所で思い出しました。

ここは草原だぞ、と。

じゃあここは二階でいいんだと納得です。

さて二階ですが一階と同じく薄暗いのです。窓も明かりもなくてどうして人間らしくふるまえるのかと思いますが、建築家じゃないボクが言ってもしょうがないのよね。

色々文句言つて、じゃあお前がやりなさいよ、と言われたらボクは建築家じゃないぞ、と。

なんで君の仕事を、ボクがやるのだったら君はいらないよ、となるということを理解しなさいよ。

「そう思わないか」

「……」

ボクは誰かがいたからつい話しかけたのだけれども知らないチビッコなんですよね。チビッコ。

そういうチビッコという存在が後の未来を作り、時を紡いでいくということボク達は知って行かなければならないのかしらんとも思うわけです。大切になさいよ、と。

「こんな所にて親はどうしたんだい」

「……お母さん」

「お母さん？」

何という事でしょう。このようなチビッコにかぼそい声で母を求めさせるなんて、なんて酷い親だと。

未来を大切にしない奴なんて死んでしまいなさいよ、と思うわけです。

「お母さんは忘れたの？」

そうね、チビッコが言うわけでしてね、ますます酷い親だと、捨てられたのでしょうか？ 気の毒だよね。

あいにく手持ちに食べ物がないので悔やんでいるわけですが、実家にはあります。

たらふく食べてあったかくして寝てくださいよ、と。

「僕の事、忘れていたでしょう。アオイお母さんは僕の事好きじゃないでしょう。アオイお母さん嫌い」

なんたるクソガキでしょうか。ボクは礼儀を欠けていても多少は許容範囲なんですけども、見ず知らずのチビッコにいきなり嫌いか言われる由縁なんてないんですよ。

ウルサイクソガキだ、と君は。

「デストロイ」

ボクがそう叫んだ瞬間、眩い光で部屋が照らし出される。

聖なる光が邪を払い浄化していく。具体的な効能は仏の顔も百回までは大丈夫だぞ。

いいか十倍だぞ、十倍。

「光に……包まれて行く……これが……生命の光……？」

「家に……お帰り」

愛。愛する心。それはLOVE。全てを慈しむ気持ち。

宇宙の歴史の螺旋がまた一つ繋がっていく。

隣人を愛し、愛され、営んできたボクらだからこそ、ボクらはここに  
にいるんだ。

許す、許さないんじゃないんだ。全てを感じ、全てを受け入れ、  
全てを全てにする。

ボクはいつたい今まで何をやってきたのだろうか。

新しい、素晴らしいスタート地点にボクはたてたんだ、コレは。

「待ちなさい少年。その服装では頼りないだろう。女物だがこれを  
持って行くがいい」

ボクは着ていた上着を脱ぎ少年に与えた。

「でも、それじゃあお母さんがお腹冷やすよ」

「そんな事は気にする事はない。それよりも君は自分のことをまず考えるんだ。いいね」

「うん。ありがとうお母さん」

少年は脱ぎたての上着を羽織り、階段を下っていく。

ボクはその後姿を見送る。

愛だ。広く深い愛で繋がれば平和になるんだ。

ボクはエレベーターに乗り込み、上へと向かう間そんな事を思っていた。

13b 激闘ッ!?

エレベーターは屋上に着いた。ボクはエレベーターを動かす人も大変だなと動力の人に感謝しながら一歩外へと歩き出す。

なんだかふと、一瞬汗臭さが鼻に香った。そんな気がするエレベーターだった。

「ようこそアオイくん。お久しぶりだね」

ボクは中央に立っている人たちを見つけ、近寄っただけれども、それは知っている人たちであった。

ミリーとその仲間の飛竜と、いつぞやの異人夫婦に知らないちびっこ。

ボクはその組み合わせにおかしな物を感じた。

「アオイさん。貴女が今感じている感情は精神疾患の一種よ。治し方は私が知っている。私に任せて」

そう言うとミリーは飛竜に飛乗り、天高く舞い上がった。

飛竜はその口を大きくあけ、咆哮をあげる。

うるさい、とボクは思った。

そしてミリーを乗せた飛竜は大きく羽ばたき空の向こうへと飛んでいった。

「ちょ、ちょっと待って、そっちじゃないってば」



元気で。ミリー。

「さて。そちらのご両人。お久しぶりだね。でそっちの君は誰かな。ああ、姉か妹かはわからないけど二人は元気でやっているよ」

このちびっこ。多分、幼女でミナマナの姉妹だろう。同じ顔だし。

「くくく。アオイよ。我々は再びこの地にやってきた。何故かッ」

「浮気ばれたのかい」

「否!!我々はこの星を、我々の安息の地とする。そのために我々は来たのだ」

へー、そう。

「で」

「で、とは何だよ。で、って」

「アックナラナイデ。マケチャウワヨ、ダーリン」

「いや、まあ、君たちの理由は理解したけど、なんでボクはここにいるのかなって。」

君たちがここに住もうがボクはあまり関係ないからさ」

別にボクがこの世界を管理している神でもなければ、治める支配者でもないんだよね。ボクは。

だからそういうのはあまりって気分なんだよね。

「よくぞ聞いてくれました。そう。私は貴女に復讐がしたかったです」

へー。

「うわー、ぎゃふん。まいったー。これで家に帰してくれるんですか」

「四つん這いになれ」

「嫌だよ」

「じゃあ、ダメ」

そういつて男は手元の謎のスイッチを押すと、この星の生物は滅んだ。

B A D e n d? 「逆上させてはいけない」

エレベーターから出て汗臭いと思ったら宇宙人とミナマナの姉妹がいた。

「復讐にきた」

「そうかい」

彼らは恐るべき事に宇宙人で侵略者で復讐にきたらしい。

恐いね。宇宙人で復讐ってあれだよ。ぐにゃーってなっつてうねっ

て、さ。

アオイサンアオイサンアオイサンアオイサンアオイサン  
アオイサンアオイサンアオイサンアオイサンアオイサン  
アオイサンアオイサンアオイサンアオイサンアオイサン

キ・モ・チ・イ・イ

とかなっちやうんだらうね。シオンさんからあれ見せられた時からしばらく頭から離れなかつたよ。

たしか8メロディでも歌えばいいのかな？違うか。

そうだ。祈るべし祈るべし。

えーっと、とりあえずよろしくっと。

「勝った!!!」

「ばーかばーか」

「アツクナラナイデ、マケルワ」

そういつて女房と姉妹の一人は消えていく。

激闘でボクの身体もとりあえずボロボロだし、なんだか眠たい気分なんだな。おやすみドナくん。

「あなた！起きてー。会社に遅れるわよー」

シオンさんの声にアオイは目を醒ました。朝餉の香りが鼻腔をくすぐる。

御膳が運ばれるまで朝刊一面にさつと目を通す。ロンドンで自爆テロか。

ちっ、舌打ちが漏れる。

(……それにしてもなんだか長い夢を見ていた気がする)

投げっぱなしend「夢オチッ!!」

エレベーターから外に出ると宇宙人夫妻とミナマナの姉妹がいて、復讐だとかいったから勝負してあげる事にしたんだよ。

ボクは帰りたい。それだけなんだ。帰しておくれよ。

「勝負方法はそうだな。第二回料理バトルだ」

ボクは考えた。愛はもう先日だした。ならどうしようか、と。そして思いついた。

一週間後。そこには空腹で倒れている夫婦二人の姿があった。種明かしをすれば簡単なんだよ。

空腹は最高の調味料。だから皆がお腹空くまで出さないよ、と言ったら納得してくれた。

で、一週間彼等に何もださなかった、と。こうなるわけなんだよね。

ボクは別に空気中の霞をこっさり食べていたからいいけど、普通の人には耐えられないよね。

ミナマナの姉妹？家にさっさと帰しましたが何か？

ちなみに、エレベーターの動かす人たちはニセミナマナの二人だった。忘れていたわ。

激闘ッ！！ワスレテタワー編 完結ッ！！

13a 13bは繋ぎ……だと……(前書き)

13bは13aのおまけで繋がりはないです

13a 13bは繋ぎ……だと……

エレベーターから出るとそこは屋上であった。

風が気持ちいいんだよね。空は青空、陽も出ている。手すりからちょっと顔をだして下を覗き込めば、地上は精巧につくられた模型にも見える。

いい景色だ。うん。心が安らぐ。壮大な景色。遠くを見れば海が見える。海である。海は素晴らしい。どのくらい素晴らしいかと言うと素晴らしいと評価出来るくらい素晴らしい。それほどまでに海は素晴らしいのだ。

普段は山中で生活しているからね。ああ素晴らしいきは海だ。

……すいません……ボクウソついてまーした……正直海とか、そんなに好きではありません

「こんにちは、アオイさん」

ボクが絶景を眺めていると、後ろから呼びかける声が聞こえたので振り返るとそこにはミリーとその相棒がいるではないか。

随分と久しぶりであるものだ。よくよく見ると異人夫妻にニセミナーナとミナーナもう一人の姉妹が後ろにたっている。

ボクとミリーと相棒、異人夫妻にニセモノ二人と本物一人の七人と一匹が屋上にいることになる。ということはつまり

、結構人が多い。

「こんにちは」

何度も言うが挨拶は大事なのである。コミュニケーションの始ま

りだ。挨拶、元気良く、大きな声で。

「はい、こんにちは」

うん。挨拶だ。……挨拶だ。うん。気まずいぞ。なんでかわからないけど気まずい。これはあまり親しくない人と偶然会ったぐらいに気まずいぞ。

話のネタがない。

「あつー、景気はどうだい。最近の」

「えっ、あつ、うん。それなりかな」

「うちもそうかな」

……終わってしまった。ううむ。まいった。

「そちらの方々とミリーって不思議な組み合わせだね。お嬢さんは初めましてかな」

言ってみてから気がついたけど、接点も何もよね。この人たち。特にミリーナマーナのもう一人の姉妹とはさ。

ミリー達と異人夫妻もそうだけど何らかの偶然でボクと関わりあるから、そこを起点にしてって事も無くはないのかなと思うのだけど、この娘っただけはそうはならないのよね。

「初めましてなの」

「初めまして。ボクはアオイだよ。君は」



「アイネ」

「アイネちゃんか。可愛らしい名前だね。よろしくね」

「名前で呼ぶなこの下衆野郎。てめえに名乗るのも糞嫌だったけどこつちもそこまで子供じゃねーから我慢したつーのに。調子のんじゃねーぞ」

「ごめんね。なんて呼べばいいのかな」

「うるせえよババア。大人だろ。そんぐらいてめえの無い頭で考えろよ」

「……強烈だね」

こう教育というか、環境というのは大事なのだという事を痛感したよ。マナミナと同じ遺伝子で、同じ顔で、こんな口汚く言われると悲しいものがあるのさ。

というか初対面でなんでこんなに嫌われているのかが見当つかないのですよ。これがツンデレとかいうヤツなのでしょうが。

「ボクが何かしたかな」

「ボクキタツ！！いい大人が自分の事をボクとかキタからコレツ！マジうけるんですけどー」

どうしたら良いのかと頭を抱えなくなってきました。最近の若者はと嘆きたくなるのですが、それもどうかと思っけども、ボクはとりあえずこの娘をぶん殴りたい。そう思うのです。

「所で、皆はなぜここにいるんだい。ボクは気がついたらここ前  
にいてさ、とりあえず入ってみたものの、なぜか出られなくなっ  
ただけど」

「そんな話誰も興味ねーから」

「よくぞ聞いてくれました。この塔は貴女に恨みを持つ人たちに復  
讐の場を用意するために我らが主が用意した、いわば貴女の為の塔  
なのです」

なんてこつたい。ボクはなんでか知らないけどそこまで恨まれて  
いたのかい。知らなかったよ。

「ここから脱出するには我々を倒して、我らが主を倒さなければい  
けませーん」

「くっ……ボクは……ボクは帰るッ!! 君たちに勝って帰るんだッ  
!! 殺つてやるさ」

そういつてボクは彼らに飛びかかっていった。

……

……

…

「ただいまー」

そう言つて彼女、アオイさんはいつものように家に入ってきた。

「遅かったじゃない。皆心配した……その娘は？」

まったくこの人は。時々ふらっと出かけて家を開けるんだから。言ってから行けばこっちだってあまり心配しなくて済むのにさ。

「この娘かい？お土産だよ」

そういつてアオイさんに前に押し出された娘は……はーん。アオイさんたらまたからおうって思ってたんでしょね。そのてにはのりませんよーだ。乗ってあげるふりをして……くっひひ。

「ふーん。お名前は」

「……アイネ」

「アイネちゃんか。でマーナ、ミーナのどっちなの」

「あっおかえりー」「なさいなのー」

「えっ!?!」

後ろを振り返るとマーナにミーナ？あれ？え!?!なんで。

「前に言ったるセシリー」

そう言っって彼女は悪戯成功だとも言うつのかのようにクシシと笑った。

「でも……そうだな。アイネ。君は今からマーナだ。新しい君は今日の今からマーナだ」

「あ、あの……私も……」

「あっミリー姉さんじゃない。久しぶり」

扉の影に立っていたのか気がつかなかったわ。

「姉さんは双子じゃあ無いわよね。姉妹もいないわよね」

「そうだけど？」

「ですよー。姉さんまで実はそっくりさんだとかだったら驚きで死んじゃうわよ。」

「ミリー。君も今日からは新しいミリーだ。出戻りのミリー。今日から君は鼻箒の童使いミリー改め出戻りの童使いミリーだ」

「ちょっと待ってよ。出戻り違うし、鼻箒も違うのー」

「笑いながら姉さんの後ろに控えていた飛竜をみて食費が大変だと思っただ。」

13a 13bは繋ぎ……だと……（後書き）

前書きから移動。

13bでミリーを退場させていたのをワスレテタワー。と前書きに書いておいて、見て見たら退場していた。なのでそれをワスレテタワーと書いた。んで、さらにみたら13bと13aは繋がらないよと書かないと

紛らわしい事に気がつく。だから前書きに書いて、前書きに書いてあったのをこっちに移動。

んで新作のジョークの「92」はもう古いのでさらに新作のジョーク「98」

不粋だと思いますが、意味がわからない人は「ジョーク 囚人」で検索してみてください。

## 14 生娘悟る！？

ふ、ふん。あんたたちに言われたから立退きしたんじゃないからね！引越したくなつた気分だったから、引越したただけなんだからね！勘違いしないでよッ！！ふんッ！！

ツンデレも搭載されているボク何だけど、この間シオンさんにツンデレっぽくしてみたら、鼻で笑われました。

「ステレオタイプなツンデレ何ですね。はいはいツンデレツンデレ」  
そりゃあボクはツンはないからね。デレもないし。元々両方備わってないし。だからといって、どうこう気持ちもないんですけどね。素直が一番なんですよ。うん。嘘ついた。ボクはツンデレなんかじゃあ、ありませんよ。

さてさて、ボクたちは新しい住まいで生活しているわけですが、前の住まいは貴族（笑）に接收されました。なんでも放牧地とレジャー施設をつくるだとかで。

で、年長組はそのまんまその放牧地の従業員になった、と。

ちびっこ五人とボクはテキトー王国北東の村で暮らしとるんですよ。

農地開拓して、皆で、ね。午後は家の手伝いを終わった村のちびっこどもに勉強教えたりしてね、家のちびっこらがだけどね。

ボク？ボクは村のお姉さまがたと一緒に内職ですが何か。

しかし、まあ、お姉さまがたのお話しはなんともかんとも。生娘のボクには刺激が強すぎるのですよ。

多分、お姉さまがたもボクがそうだという事を察していて、ボクをからかっているんでしょうね。それで二度美味しいと。

前の生活に戻りたいのですよ。皆が食事の用意して、ボクは好きな事やれていた、食う寝る遊ぶの三拍子揃っていたあの生活に。

瓶詰めの際に蓋をかぶせる作業は飽き飽きなのですよ。コルク持つて、蓋をして、次にまわす。あー、いあいあー。ボクはコルク人間じゃあないのですよ。コルク女でもありません。ボクは人間なのですよ。

……あれ？ ボクって……人間でいいのかな……む？ むう？

……違うや。ちげーよね。うん。

拙者、修行中の身でありんすよ。修行中のあちきが、何とも贅沢に食う寝る遊ぶだあ。ダメだなー、ダメだよなー、うん。

修行しよう。そうしよう。と言っても何すんのかわかんねーっすけどね。それっぽい事がいいよね。

と、言うわけでそれから三ヶ月後。二ヶ月弱でみっちりと害獣駆除で稼ぎ、ちびっこ五人が贅沢しなければ半年ぐらいは暮らせる分貯めて、それを持って近所の子沢山夫婦にお願いして預かってもらってきました。

そして、ボクは今、修行地として選んだソレツポイマウンテンは山頂にいます。四ヶ月はここに滞在しようと思っております。

まずは滝にうたれようと思い、滝を探したのですが、流石それっぽい代名詞であるソレツポイマウンテンです。いかにも修行に使ってくださいといわんばかりの滝があるではありませんか。これにはボクも歓喜です。

ボクは恐る恐る足を水につけると、冷たい。予想外で、想定外です。こんなに冷たい水にうたれると、ボクの大事な部分が活動停止して、ボクが死ぬ気がするので修行っばいことから仕分けです。残念ながら廃止の方向でお願いします。

じゃあ、他に修行っていうと何があるのかなって考えると、山のとっぺんで無の境地に至ることだよな。美少女が座禅をくむ後ろから朝日が昇り、逆光で神々しくもあり、それはまるで一枚の絵画の様であった、と。

うん。自画自讃も嫌いじゃないボクがさっそく自画自讃するぞ。それはとても良い事だ。じつに修行っばい修行だ。さすがボク。

今日はもう暗いし、寒いから明日から頑張ろうと思う。

一ヶ月たつてやっと気がついた。本当は気がついていて。だけど、気がついていないふりをしていたんだ。

起きた時には、もう、日がのぼりきっているっていう事を、ボクは気がつかない事になっていた。

暗くなつて、身体を休めたら、周りにはもう昼だった。だからしよ  
うがないと。

そんな事はないだろう。間に合わなかったら、間に合わせればい  
い。いつからボクはそんな人間になつたんだ。

修行を選んだのはボクだろ。やれるやれないじゃない。やるんだ  
ボク。ボクはやるぞ。

まだ日ものぼっていないソレツポイマウンテンの山頂に一人の少女が座禅をくんでいた。彼女に近寄れば聞こえるのは静かな呼吸音だけ。彼女はそこで集中して己を無にしている。

星の鼓動。古きもの、新しきもの、これから生まれるあらゆるも



の、息遣いや鼓動がここでは感じられる。自分はこの星であり、部品であり、消耗品であり、ボクは全てで一部分である重要な構成品なのだ。

それっぽい事を悟った彼女は、結局それっぽい事をソレツポイマウンテンではこれしか悟れない事を悟り、予定を変更してもう下山する事に決めた。

ソレツポイマウンテンではそれっぽい事しか得られはしないのだ。

下山した彼女を待っていたのはちびっこコルクの蓋で、村のお姉さま方からかわれながら、今日もコルクで蓋をする作業に精をだすのだった。

「アオイちゃんが男に騙されたとか噂あったからおばちゃん心配したわー。アオイちゃんうぶやし」

## 15 投げっぱなしジャーマン

今日もコルクだよ。流れる酢臭い瓶に今日も蓋をするよ。

こんにちわ。近所でいつ見ても若いね、と評判のアイイです。孫ができました。といっても嫁いだミナマナの子供なんですけどね。

で、なんかね、いやーな評判がね、ちらほら聞こえてくるのさ。ボクが老いないのは悪魔だからとか魔女だからと。外れじゃないけど正解でもないんだよね。おいしいです。

村の人は良い人多いけど、良くしてくれるのはボクが仲間、害のない人間だと思われるからで、こうなってしまうと面倒が起きちゃうから引つ越そうと思ったんだ。

幸運な事にこの村では孤児がないし、狭い村だから子供保護出来ないのよ。ほら、腹大きくなっているのが見つかって出産して捨ててもごまかせるじゃん。死産だったとかで。でもその後にはボクがどっかから赤子拾ってきたら、事実はどうあれ、ね。ぎくしゃくしちゃうよね。

という理由でボクは東方にあるニヤパン国にきております。ニヤパンはボクが生前いたヤマトにクリソツなんだよ。というかそのもの。茶飲んで漬け物つけて農耕民族。水が非常にあいます。

ボクは本州最北端にある霊山へと観光がてら来たのだけでも、この国凄いや。猫耳とか普通にいるのよ。あと蛇女とか。

「飼い主よ」

ボクも野良猫又ちゃんのタマを飼い猫又にしたんだよ。黒白の小鉄タイプの猫又ちゃん。と言っても黒白のブチも小鉄タイプも猫又

になれば大差ないんだけどね。でも黒白猫又で一番可愛いのはうちのタマ。異論は認めらない。

「なんだタマ」

「そろそろ昼だ」

「そうか」

「そうだ」

「ねこまんまか？」

「油がいい」

「猫又だもんな」

「猫又だからな」

……あれ？油は化け猫じゃあなかったっけ？猫又？聞いてみよう。そうしよう。

「時にタマよ。お前さんが昼だといっているので考えてみたが、ちょっといいかい」

「かまわんよ」

「猫又と化け猫は違う物なのかい」

「そりゃあそうよ」

「そうか。なら良いのだ」

ボクはそういつて油をたらしたタマご飯皿をそつと床に置いた。タマは油をなめとり始める。猫耳少女が地面に這いつくばって、舌を出して皿の上の油を舐めとる姿。これがモエなんですネシオンさん。わかります。

そしてボクは念願の温泉付きマイホームを建てたぞ。室内風呂に野外風呂付きのリビングに、客間一、寝室二にトイレなしの平屋だ。山の中腹に建築したから夏は涼しく、冬は厳しいんだぞ。だ  
けどここいらは近所にだーれもないから畑開墾し放題だし、大声だし放題だし。つうか隣家がない。集落じゃあないし、そもそもいない。

孤独を愛するlove仙人アオイです。

家を建てて120年弱がたちました。モノノケ認定されているらしいですよ。あ、タマは亡くなりました。

なんかね、巷ではボクを作物を枯らす童女とか言われているらしいんですけども、ボクは関係ないんだよね。

不作も何もかもボクは関与していないし、ボクの畑が毎年実り良いのは君たちの土から何か吸い取ったとかじゃあないんだけど、彼等も人のせいにするのがお上手だよね。

「そうおもわないかいタマミ」

「しらんがにゃ」

タマの娘のタマコの息子のタマキチの娘のタマミの首元を指で搔

いてあげながら聞いてみるもつれないお返事ね。

猫又の子も猫又でした。うん。それじゃあ化け猫とは違っつてな  
っっちゃうよね。

タマミは真っ白の毛並みのおかっぱの可愛い猫又ちゃん、まだ  
幼いから舌足らずでそれがまた可愛い。

「タマミは冷たいね。アカイはどう思う」

「……」

アカイはつい最近、ボクの家を荒らしていた狐ちゃんである。  
デエコンを食い荒らしている所をタマキチが襲いかかり、それを見  
たボクが保護して飼っているわけなんだけど、捕まえた時には二  
本の尻尾だったのに今では三本の尾の狐ちゃん、驚きです。だか  
らどうしたと言われたら困るんだけどね。

そんなこんなでボクらはまだ生きております。

## オタワ

「アオイさんカブトムシ見に行こう、ねっねっ」

男の子みたいなショートカットに黄緑のシャツと短パンで露出している肌は日焼けしている少女アカネが虫捕り網と虫かごを肩からぶら下げ、縁台で日にあたっていたボクの服の裾をグイグイと引っ張る。ボクはしょうがないなあ、と思いながら立ち上がり、彼女の手をやさしく離す。

「行こうか。外は暑いよね。そういう時はどうするって約束だったかな」

「帽子ッ」

「うん。そうだね。待ってるから取ってきてなさい」

「はい」

彼女はそういって靴を乱暴に脱ぐと小走りで家の中に戻って行った。ボクは彼女の靴を並べ、自分の帽子を取りに部屋に行く。

部屋の片隅に置いてある机の上の帽子を取り庭に出ると、さつきまでの彼女に麦わら帽子をかぶった彼女が待っている。目は早く行こうと言っている。

ボクは、そんなに慌てなくてもカブトムシは逃げないよ、と言おうとしたがカブトムシも用事が済めばどっかに行くだろうと思いき、口に出すのは止めた。ボクは自分がバカじゃないかと思った。反省はしないけど。

裏の山の山道を二人で歩きながら、昨日仕掛けておいたカブトムシホイホイをチェックしていくがまだカブトムシは虫かごの中にはいない。畏とは関係なく捕まえた小さいミヤマクワガタが彼女の今日の戦果である。

「ええーい」

捕まえたばかりのミヤマクワガタをボクの鼻先に押し付けてくるアカネ。

「デ・ガ・ワ！！ デ・ガ・ワ！！」

ちよっ……イダダっ！！挟んでるッ挟んでるから……うわっ！！アガッ……

前々から約束していた虫捕りの日。ボクは楽しみにしていたんだ。

裏の山に一人でいつちゃあいけないってアオイさんはボクのことを子供扱いするから、本当は毎日でも行きたいんだけども、すっごい怒るし行けないんだよね。

アオイさんも日頃忙しいし、おタマさんらもそうだから今日を待っていたんだ。

で、クワゲットしたんだけど、その時に昨日みたテレビのコメデイアンを思い出してね、アオイさんの鼻にクワを近づけたら……パツクンチョしちゃって、いや、笑ったね。その時は。

鼻先にクワをつけたアオイさんがさ、混乱しちゃって……転んで……動かなくなるまでは……さ。

最初は冗談かなって思ったけど……ね……。現実だったんだ。

で、ボクはいまアオイさんの知り合いだというシオンおばさまの下で仙人になるための教育を受けてます。

アオイさん。天国でボクを見守っていて下さい。

終わり



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5264n/>

---

ボクとイロイロと異世界

2011年1月20日12時30分発行